

ギャップイヤー・プラットフォーム(GP)

「ギャップイヤー白書」 2013

ギャップイヤー
それは「空白」ではなく「機会」の創出

「ギャップイヤー白書」編集委員会
2013年6月22日

目次

第1章 ギャップイヤーの意義と目的

第1節	ギャップイヤーの定義	砂田 薫	3
第2節	なぜ今、日本でギャップイヤーなのか？	砂田 薫	5
第3節	ギャップイヤーへの期待、効用そして懸念	砂田 薫	6
第4節	2011年は日本におけるギャップイヤー元年？	青 晴海	7

第2章 ギャップイヤーの事例と課題

第1節	海外でのギャップイヤーの人材評価	砂田 薫	9
第2節	世界の大学のギャップイヤーに関する最新動向	砂田 薫	10
第3節	“ギャップイヤー発祥の国”「英国」からのレポート	井本 かおり	11
第4節	ギャップイヤー海外事情（米国編①）	湯上 千春	12
第5節	ギャップイヤー海外事情（米国編②）	湯上 千春	14
第6節	ギャップイヤー海外事情（英国編）	藪内 達也	16
第7節	ギャップイヤー海外事情（カナダ・中国・南ア編）	藪内 達也	17
第8節	日本でのギャップイヤー活動タイプ	鬼頭 豊和、原 卓矢	18
第9節	ギャップイヤー経験をしたフロンティア（先駆者）達の言葉	藪内 達也	22
第10節	ギャップイヤー経験者が乗り越えたギャップイヤーに関する課題	鬼頭 豊和、原 卓矢	25

第3章 ギャップイヤーに対する評価

第1節	日本でのギャップイヤー経験前後の評価の試み	鬼頭 豊和、原 卓矢	27
-----	-----------------------	------------	----

第4章 ギャップイヤーへの支援

第1節	これからの社会へ ギャップイヤー推進の是非と目指す社会	開澤 真一郎	30
第2節	望ましいギャップイヤーとは？4つの論点から！	開澤 真一郎	31
第3節	ギャップイヤーの望ましい推進へ、各セクターに対する提言	開澤 真一郎	32

第5章 ギャップイヤーの実施・推進体制

第1節	推進機関=ギャップイヤー・プラットフォームのこれから	開澤 真一郎	35
-----	----------------------------	--------	----

「ギャップイヤー白書」編集委員会

砂田 薫	日本ギャップイヤー推進機構協会	[JGAP] 代表
開澤 真一郎	日本国際ワークキャンプセンター	[NICE] 代表
鬼頭 豊和	国際文化青年交換連盟日本委員会	[ICYEJAPAN] 理事
原 卓矢	国際文化青年交換連盟日本委員会	[ICYEJAPAN] 会員

ギャップイヤーの定義

砂田 薫（日本ギャップイヤー推進機構協会[JGAP]代表）

この章では、ギャップイヤーのそもそもの定義や意義の変遷を整理してみましょう。まとめると、もちろん個人の成長や価値観形成や幸福に関わるが、社会の要請の観点からは、グローバル人材育成機能の文脈と社会的課題の克服人材輩出への期待がかかる。

1. ギャップイヤーの定義

ギャップイヤーは、1960年代に英国で始まったとされる。2004年に当時の教育技能省（現・教育省）が、ギャップイヤーが90年代、とりわけベルリンの壁以降、英国の学生が海外に安価で渡航できるようになって一般化したのを受け、英国国家に及ぼす影響を掴みたい趣旨でロンドン大学に委託した研究で図1のように、概念整理を行なっている。

それによると、ギャップイヤーは1960年代に英国

で認知されるようになった慣行で、元々は大学への入学資格を得ている若者が、入学を延期して親元離れた非日常の環境下で、約1年間にわたり旅やボランティアや課外活動としての国内外留学などの「社会体験」やインターン・アルバイトの「就業体験」を行うものであった。ギャップイヤーという言葉は、ネイティブにとって「year（1年）」という「期間」よりも、「旅」や「活動」を想起する。それは、日本語にするなら「かわいい子には旅をさせよ」のイメージや価値観といってよいだろう。期間も概ね「3ヶ月から2年」の概念である。また取得時期も大学入学前から入学後の学部時代の休学や卒業後のスキルアップや能力開発も概念として適用されるようになった。年齢については、18-25歳がおおよその対象。しかし、英国には旅行傷害保険のような「ギャップイヤー保険」も存在し、40歳まで加入できるものもある。卒業後と概念が広がっていく過程で、前職から新しい勤務先に動く間の期間の「キャリア・ブレイク」「サバティカル」とも近接概念になってきたともいえるだろう。

日本では、例えば、これまで使命感と目的持って「海外ボランティアや国内養護施設でインターンで1年休学」しても、「空白期間」といったマイナスイメージの言葉で片付けられていた。しかし、ポジティブな「正規の教育・訓練から離れて時間を過ごす機会」で、スキルを獲得したり、“おとな”になるという価値づけが始まりつつある。そもそも「人材育成」は正課だけで形成されるわけでもなく、課外活動で、形成されるホリスティックなものという認識が、東大のFLYプログラム（特別休学制度、活動援助奨学金付）という新1年生が利用できる「ギャップイヤー制度」をみても、裏付けられる。尚、米国では、ギャップイヤーは「comfort zone（快適区域）」から脱却するところに意味があるとよく表現される。

2. ギャップイヤーの4層構造

ギャップイヤーを理解するには、図2の4層構造を理解する必要がある。それだけ、いろんなギャップイヤーがある。

まず第1階層の「プログラム」は、プリンストン大学の1年の海外ボランティアのギャップイヤー・プログラムや、米国のピース・コー（平和部隊）やTFA（ティーチ・フォー・アメリカ）、日本の「海外青年協力隊」（2年）もそうだ。大小のミッションを持っているのが特徴だ。

第2階層は、先述の東大「FLYプログラム」や、国際教養大学（秋田）のギャップイヤー入試組（入試は秋で、入学は翌年9月）が該当する。自主的になんらかのテーマ設定をし、提案し、採用されれば実行する。企業に入社してから海外ボランティアを行う「留職プログラム」や、インドでの「鍵付冷蔵庫」のヒットなど、韓国・サムソンが20年以上続けている「地域専門家制度」（4千人以上が1年間途上国で言語と文化を習得）も該当するだろう。

第3階層は、プログラム（既制服）というよりプラン（注文服）であり、より一般的なものだ。自主的にテーマを設けて世界一周の旅に出たり、語学留学、ワーホリ、海外インターン、被災地・限界集落ボランティア等を行うものだ。私は、日本ではギャップイヤーが「高等教育」の観点で議論されるのは、当面この第3階層までだと考えている。

第4階層は、さらに“ゆるく”、本業を離れ、じっくり心身を休ませることを意味する。実は、ハーバード大学は、高校時代まで学業に専心していた入学生にギャップイヤーでリセットを勧めているが、これによるバーンアウト（燃え尽き症候群）や中退率低下機能を認めている。東大も秋入学構想時、中間報告での記述に半年ギャップイヤー（ギャップタームは和製英語）のメリットを「多様な体験活動を積む“寄り道”を設けることで、受験競争で染み付いた偏差値重視の価値観をリセットし、大学で学ぶ目的意識を明確化できる」としており、この考えに近いことがわかる。

図1

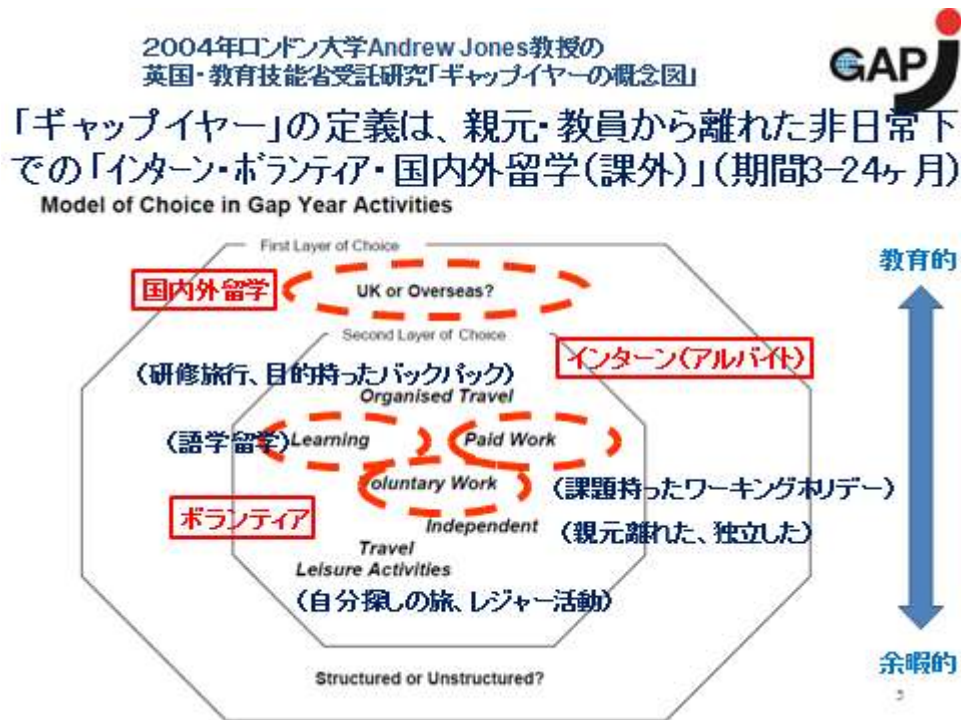
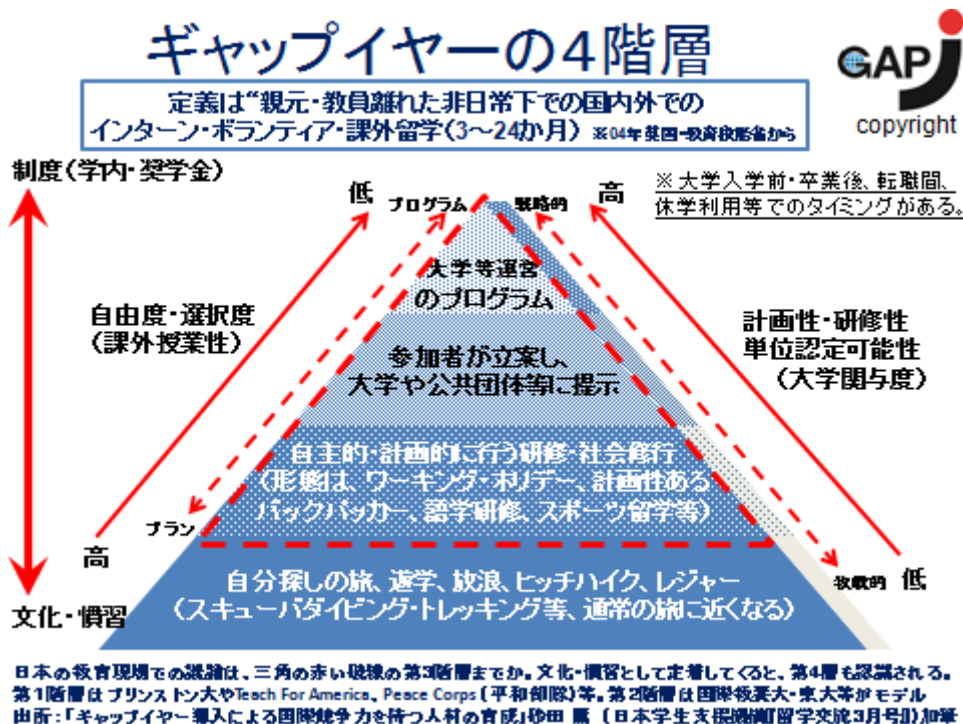


図2



なぜ今、日本でギャップイヤーなのか？

砂田 薫（日本ギャップイヤー推進機構協会[JGAP]代表）

この節では、ギャップイヤーが必要とされる・注目される理由と背景を考える。まとめると、もちろん個人の成長や価値観形成、幸福に関わるが、社会の要請の視点からは、グローバル人材育成機能の文脈と社会的課題の克服人材輩出への期待がある。

1. 背景

高校卒業から大学入学までの期間に、親元や教員離れ、課外の国内外留学やボランティア等の「社会体験」やインターン・アルバイトの「就業体験」などを行う英国の慣行「ギャップイヤー」が世界で関心を集めている。それは、なぜなのか。日本での進展などを捉えながら、ギャップイヤーの持つ高等教育の人材育成機能とその国際競争力向上の可能性について、考察・報告したい。

5月21日（火）19時半から放映されたNHKクローズアップ現代の「ギャップイヤー特集」がツイッター上やフェイスブック上で、話題になった。13日にこの番組表がアップになったので、JGAPのフェイスブック・ページで紹介すると、またたくまに1100リーチを記録した。それは、ギャップイヤーの概念や仕組みが進行すれば、日本の窮屈な「新卒一括採用」が通年採用へ移行につながり、そもそも人材の採用基準や人材評価が大きく変わっていく可能性を秘めているからだろう。つまり、ギャップイヤーをブレークスルーに、窮屈で岩盤のように頑なだった日本の一辺倒な価値観が崩れるきっかけになるのではという期待がそこにはある。

また、「知識」という視点から見ると、ハーバードであろうがスタンフォードであろうが、ネットで相当深い情報が取得できる時代になっている。重要なのは「実体験」、生身の体で社会に対する働きかけが大きな意味を持つ時代になってきた、そういう背景もギャップイヤーが尊重される機運があると考えられる。

大学でも「座学」中心の授業から、大学の垣根を越えて社会と接して、学んだことの適用具合をみる「参加型」授業のアクティブ・ラーニングや、サービス・ラーニング、PBL（プロジェクト・ベースト・ラーニング＝課題解決型授業）が増えてきた。このトレンドの究極が、教員や親から離れたところでの社会体験・就業体験というギャップイヤーがあると解釈している。

2. 注目される経団連の提言と文科省の動向

6月13日付で、経団連は「世界を舞台に活躍できる人づくりのために」を発表した。これは、一昨年6月に発表した「グローバル人材の育成に向けた提言」のフォローアップ版の意味合いがある。前回もそうだが、今回もギャップイヤーにポジティブな評価をしているのが特徴

だ。17ページに「ギャップイヤーを利用した多様な体験活動（ボランティア・留学・インターンシップ等）も、グローバル人材に求められる素養を育む上で効果的であり、産業界としても、採用時に、これらの多様な体験を積極的に評価することが求められる」と企業の人材評価に変化をもたらす提言になっている。

提言内にある「英国におけるギャップイヤー体験の評価事例」はJGAPがコーディネートしているが、その記述は「企業の採用面接においても、ギャップイヤーを体験した学生はしていない学生より、一般的に幅広い視野を持ち、自立し、協調性もあるとして学位と並んで重要な評価対象となっている。（後略）」とある。

一方、6月14日に、下村博文文部科学相は14日の定例記者会見で、大学の秋入学とそれに係る半年のギャップイヤーを進めるための検討会議を設けると表明した。今後、大学関係者や経済団体、海外事情に詳しい研究者等を集め、普及促進の制度作りや、高校卒業と大学入学までの期間（ギャップイヤー）に行う活動の支援策、国家公務員など資格試験時期のあり方、就職活動時期との調整などが検討される。

2011年12月、文科省の諮問機関である中教審で、金子委員から提出されたスライドには、以下のようなものがあつた。「学生（欧米に比べ）勉強していない 教育：密度が低い 大学システム：革新が生じていない」。東大の教育学の第一人者、すなわち教育のプロが認めてしまっている。

同年11月に行なわれた「政策仕分け（大学編）」でも、意見で「国際競争力は今後なくなると思う。産業界にとってglobalなリーダーとなる人材への教育は極めて不安」など厳しい評価を受けた。

OECDは、国際的に応用力・創造性等を重視した教育の方向性として3つの力（key competency）を重視していて、以下の3点である

- ①言語・知識・技術を相互作用的に用いる。
- ②異質な集団で交流する
- ③自立的に活動する

これらは、ギャップイヤーを通じてこれらの能力は開発されるものと確信している。そして、グローバル人材として国際競争力があるだけでなく、広く地域社会の課題を解決する人材の輩出につながることだろう。

ギャップイヤーへの期待、効用そして懸念

砂田 薫（日本ギャップイヤー推進機構協会[JGAP]代表）

この節では、ギャップイヤーの意義やマイナス要因の懸念を整理してみる。もちろん個人の成長や価値観形成、幸福に関わるが、社会の要請の視点からは、グローバル人材育成機能の文脈と社会的課題の克服人材輩出への期待がかかる。懸念について、社会が軽減したり、解決法を見出すことが肝要。

1. 期待と効用

ギャップイヤーへの期待は、ズバリ、「グローバル人材」「国内地域・社会的課題の解決型人材」などの「リーダー育成」に尽きる。私は、招待論文「ギャップイヤー導入による国際競争力を持つ人材の育成」（日本学生支援機構、2012年3月。※サイトで無料で閲覧できる）で、敷衍（ふえん）している。

例えば、南アフリカの高度人材養成教育機関 African Leadership Academy の「ギャップイヤー・プログラム」では、以下のようなリーダーシップに必要な能力やソフト・スキルが得られるとしている。

- ・ international Perspective 国際的視野
- ・ Decision-making 意思決定力
- ・ Relationship-building 関係性構築力
- ・ Problem-solving and Resourcefulness 問題解決力と独創性
- ・ Communication, especially across cultures 異文化コミュニケーション
- ・ Organization and Responsibility 組織力と責任力
- ・ Teamwork and Flexibility チームワーク力と柔軟性
- ・ Maturity and Self-Awareness 成熟と自己の気づき
- ・ Independence and Self-Confidence 独立性と自信
- ・ Language Fluency 言語能力

定性的であるが、このような能力が培われるなら、理想的なプログラムだろう。

さて、よく聞かれるギャップイヤーの効用と懸念であるが、昨年 TBS で話した内容を列記する。

【ギャップイヤーの効用】

- ①バーンアウト（燃えつき症候群）と中退率の低下（英国・米国等）
- ②入学後の目的意識が明確化（2010年の豪州の査読論文で、大学入学前ギャップイヤー経験者が、非経験者より就学力が高まり、時間管理能力等で秀でていると報告）
- ③就業力の向上（2011年の英国 250 社経営者インタビュー調査で、新人採用の際、学位よりギャップイヤーの

経験を同等かそれ以上評価すると応えた人が6割を超えた）

④職業観の醸成（2012年度「労働経済白書」でも書かれている。大卒者は3年で3割辞めているが、その処方箋になるかもしれないという期待）

⑤海外でのインターン・ボランティア・課外の留学が増える⇒「グローバル人材」としての耐性獲得と実地訓練

⑥国内での限界集落や被災地でのインターン・ボランティアをすることで、「社会的課題を克服する」研究やビジネスへの足掛かりが構築

つまり、ギャップイヤー導入で、「グローバル人材」と「国内社会・地域課題解決型人材」の両方を生み出す可能性が高い。

2. 懸念

一方、マイナスの可能性であるが、以下まとめる。

【ギャップイヤーの想定されるデメリット・懸念】

- ①ギャップイヤー期間の経済的負担増大（奨学金・寄付・助成金で対応？）
- ②遺失年収（ストレートで卒業する学生との理論的減収。但し、ギャップイヤーは、休学せず、年次が遅れない選択も可能）
- ③経済格差によるギャップイヤー活動の質（裕福な家庭は課外留学やボランティアだが、貧困層は有給インターン、アルバイト等へのシフトという懸念）
- ④高校進路指導の複雑化（春・秋入学が進行した場合）
- ⑤入学前の半年ギャップイヤーの実施大学が社会に影響力ある有力大学ばかりだと、企業の採用が「秋入学」大学に集中、「春入学」組の大学生の機会が奪われる可能性
- ⑥半年の場合、短期でのギャップイヤーの有効性（しかし、これは先行する国際教養大の半年ギャップイヤーの知見が既にある）

最後に、JGAP が日頃ニュースで発信しているように、米国や豪州、イスラエル、韓国、中国等を中心にギャップイヤーは進展中であり、その人材育成機能が注目されている。

参考サイト：JGAP 公式ウェブサイト

<http://japangap.jp/>

2011年は日本におけるギャップイヤー元年？

青 晴海（国際協力機構[JICA]スリランカ事務所所長）

ここでは、日本のギャップイヤーの潮流について整理してみましょう。学生が就業体験やボランティアなど、様々な経験を積むという活動自体は以前からありました。しかしながら、日本の社会がギャップイヤーの考え方に興味と理解を持ち、このような経験を積極的に評価するという点では、日本社会や企業の認識は不十分であったと言えます。2011年という年は、日本にとって、つらい震災に見舞われた年ですが、同時に、日本の社会的環境が変化する中で、このような経験の必要性が再認識された年となりました。

1. はじめに

法務省が毎年発表する海外出国者統計によれば、25歳から29歳の出国者数は1997年度（平成9年度）の259万人をピークに減少し続け、2011年度（平成23年度）には163万人と15年間で約4割減少している。また、日本からの留学生数も2004年（平成16年）に約8万人の水準であったものが、2009年（平成21年）には約6万人へと5年間で2万人も落ち込んでいる。青年海外協力隊への参加についても、近年は継続的に毎年3000人程度の応募者があるものの、長期的にはその数は減少している。

経済産業省は将来を担う産業人材育成の観点から、「グローバル人材育成に関する委員会」を設け、2010年に同委員会による報告書を公表した。その中で、グローバル人材に求められる能力は、コミュニケーション力、異文化理解力、社会人基礎力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）の3点であるとし、大学の国際化や企業のグローバル人材育成の必要性を強調し、人材育成のための受け皿を作るべきとの提言をしたことは、特筆すべき事象であった。

この間、NICE、ICYEといった若手人材を国内外に派遣する団体や、青年海外協力隊などの機関は、グローバル人材育成の観点から、積極的に参加者の勧奨を進めていた。また、2010年を境に、ティーチ・フォア・ジャパン（Teach for Japan：大学卒業後の若者が、一定期間教員として地域の教育の質の改善に取り組む事業を展開）、クロス・フィールズ（企業人材を開発途上国に派遣して研修を行うプログラム『留職』を提供）、ハバタク（若手社会人を主に東南アジアへ派遣してBOPビジネスなどの展開の支援をする、更に「和華」事業を展開）といった若手人材を育成することを目的とした団体が続々と設立し始めた。更には、日本にギャップイヤー制度を根付かせることを目的として、日本ギャップイヤー推進機構協会（JGAP）もこの時期に設立した。

2. ギャップイヤー・セミナーの開催

このような流れを受けて、2010年秋には、ギャップイヤー制度に関心を持つ団体を中心として、「日本版ギャップイヤー制度勉強会」が開催されることとなった。同勉強会はギャップイヤーに関連した事業を展開する団体のみならず、産業関連団体、企業、大学関係者、そしてギャップイヤーの主役たる学生及び学生団体も参加する形で開催された。勉強会は2010年秋から2011年年初にかけて合計3回開催され、2011年3月には、同勉強会の成果を公開すべくセミナーを開催する予定であったが、3月11日の震災でその計画の見直しをすることとなった。セミナー実行員会は、ギャップイヤー制度が国内外の震災復興を含む様々な社会体験を促進する場であり、ギャップイヤーの取り組みは、今の日本で必要とされるとの共通認識の下、セミナーを開催する方向で調整を行ってきた。

その結果、2011年6月13日に「日本版ギャップイヤー制度キックオフ・セミナー」が「JICA地球ひろば」で開催された。当日は300名を超える参加者を得てセミナーが開催され、ギャップイヤー経験者である原文人氏（アライアンス・フォーラム代表）による基調講演や、ギャップイヤー提供団体によるプレゼンテーションなどが行われた。同セミナーでは、今後、ギャップイヤーの日本への導入を大きく展開していくため、ギャップイヤー提供団体の連携の強化と、同制度導入に向けた、政府を含む新たな枠組み作りが必要との提案が行われた。

3. セミナー後の動向

同セミナー開催直後の6月13日には経団連が「グローバル人材育成に向けた提言」を発表し、その中で英国のギャップイヤーの取り組みを紹介し、日本においても同様な経験を持つ学生の育成が必要であり、そのような経験を有する学生を積極的に評価する姿勢が企業側に求められるとした。

これに呼応する形で、政府は、6月22日に政府の「グローバル人材育成推進会議」の中間とりまとめにおいて、「ギャップイヤーを普及・促進する」との内容が盛り込まれており、政府としても、ようやくギャップイヤーの必要性を認識した。

大学側の動きも活発であった。東京大学は、国際競争力の向上とタフな東大生を育成する、という濱田総長のリーダーシップの下、秋入学導入（及びギャップイヤー制度導入）について検討が進められてきた。2011年7月時点では秋入学導入に向けての取り組みについての骨格が発表されるなど、ギャップイヤー制度導入に向けた取り組みが急ピッチで進んだ。

6月のセミナーに至る間、現場レベルで活動する団体が中心となり、経済団体、政府関係者、大学、学生団体との累次の協議が開催された。5年後、10年後を見据えて、日本が取り組むべき課題についてこのような幅広い関係者間での協議し、一つの方向性が定まったという点で2011年はギャップイヤー制度の日本への導入についての一つの転機であったと言える。

第2章 第1節

海外でのギャップイヤーの人材評価

砂田 薫（日本ギャップイヤー推進機構協会[JGAP]代表）

この節では、先行する海外でのギャップイヤーの人材評価に焦点をあてる。それを調べることで、日本に適用している道筋が見えてくるはずである。日本社会が、本業から離れた時間を「空白」ではなく「機会」と捉えられるかがポイントだ。今後人材評価において、1年でも2年でも海外・国内でギャップイヤーという「社会修行」してきた若者を認める、あるいは歓迎して迎え入れる“多様性”を認める社会に脱皮するかどうか注目される。

1. はじめに

まず、ギャップイヤー発祥の英国では、人材評価としてどのように捉えられているのだろうか。

「CSV(Community Service Volunteer：地域社会サービスボランティア)」の調査によれば、「有益なギャップイヤーを送った学生は職場での意思決定やコミュニケーション能力、対人関係構築において優れていると雇用主の88%は判断している。また、ボランティア活動などで様々なスキルを獲得した学生は職場での昇進も早いと人事関係者の79%が認めている。エンジニア関連企業では、『イヤー・イン・インダストリー』というインターンシップ・プログラムに参加した学生を職場経験がある点で高く評価している。また、ギャップイヤー学生を受け入れることは職場の経営改革につながることもあり、受け入れ側にもメリットがあると評価されている。そのプログラムは産業界で実際の仕事を体験する国家プログラムであり、参加した学生の26%が上位10%のトップクラスの成績を収めている」とある。

（出所：文科省「英国におけるギャップ・イヤーなど、学生または入学予定者に対する長期に渡る社会経験を可能とする取組みに関する調査研究」p35、平成21年3月）

2. 豪の研究者の調査でギャップイヤーの効用が統計的に証明される

一方、2010年豪州シドニー大学のアンドリュー・マーティン教授の世界教育心理学会の査読論文が画期的だった。「豪高校卒業後の学習意欲とその成績の関係調査(350人)」では、ギャップイヤー経験者が未経験者より、「適応能力・企画力・時間管理能力」等が高かったことが統計的に証明され、世界で注目された。とりわけ時間管理能力すなわちタイム・マネジメントは、ピーター・ドラッカーも、経営者として重要な資質に挙げているほど重要なものだ。それが、非日常下での課外の社会体験や就業体験で得られるということになる。

3. 英国の調査では、学位よりギャップイヤーを重視！

また、昨年2011年英国・非営利独立系のギャップイヤー・プログラム団体では、企業経営者250人に聞いたところ、新卒の採用面接で「ギャップイヤー経験を

学位と同等かそれ以上に重んじる」という回答が6割あった。ここまでくると、大学での学びとはそもそも何かと言う議論になりかねないが、それほどギャップイヤーで得られる課外活動でのライフ・スキルは企業にも実践的で、重要視しているのがわかる。このような結果が出た背景は、経営者の多くが自ら若かりし頃、gapper（ギャップイヤー経験者）であったことが推測できる。

この調査結果について、前オックスフォード地理学教授でトニー・ブレシア首相時の経済政策顧問であったピーター・スロー博士は「この調査結果は、ギャップイヤーの価値を疑っている人の目を見開かせた。ギャップイヤー経験は、学位と同等以上の評価。アジア・アフリカ・南米での医療ケアプロジェクト・英語授業・遺跡保存運動等のボランティアの成功談は多く届いている。厳しい就職市場の中にあって、他人より印象深く、また秀でていることが求められる中、ギャップイヤー経験をする若者を後押しするものとして歓迎したい」と回答している。（出所：1992年設立の非営利Projects Abroad社。各業界250社回答、調査実施日：2010年12月29日～2011年1月12日）

同様な調査が、今度は昨年7月に英国の調査会社YouGovにより、企業の人事部門の専門職に対して行なわれている(251人)。その結果は、「Q：若者の計画的なギャップイヤー経験は、価値あることと思うか」の問いに、「強くそう思う(22%)」、「そう思う(51%)」、「Q：ボランティアや海外インターン経験が求職に好影響を与えるか」には「強くそう思う(10%)」、「そう思う(53%)」、「Q：能力・資格が同等の場合、ギャップイヤー経験をしていない応募者より経験者を好む」については、「強くそう思う(10%)」、「そう思う(34%)」だった。最後の問いは反語的だが、「Q：求職に関して、ギャップイヤー経験は価値がない」の問いに、「強くそう思う(6%)」、「そう思う(16%)」、「どちらでもない(27%)」、「そう思わない(39%)」、「強くそう思わない(12%)」といずれも人事のプロもギャップイヤー経験者を「使える」人材として評価していることがわかる。

（出所：

http://cdn.yougov.com/today_uk_import/11_0728_gapyear_hr_professional_data_for_hannah.pdf）2011年7月20～26日、調査対象者：企業人事部門専門職(251人)

世界の大学のギャップイヤーに関する最新動向

砂田 薫（日本ギャップイヤー推進機構協会[JGAP]代表）

この章では、ギャップイヤーのそもそもの意義の変遷を整理してみましょう。まとめると、もちろん個人の成長や価値観形成、幸福に関わるが、社会の要請の観点からは、グローバル人材育成機能の文脈と社会的課題の克服人材輩出への期待がかかる。

1. 海外の大学の先進的ギャップイヤー制度の事例は米国・プリンストン大

プリンストン大では、1年の学内の議論を経て2009年9月から、大学単位としてギャップイヤー制度を導入した。ネーミングはよりポジティブにということ、Gap Yearではなく、「溝」でなく「橋」をイメージし洒落ついでBridge Year Programと名付けた。これは、毎年1900人規模の「入学予定者」から35名（初年度は定員20人だった）を募り、1年弱の公共奉仕活動を行なう授業料免除のプログラム。派遣される国は、インド・ペルー・中国・セネガル・ブラジルの5カ国のいずれか。制度導入の目的は「入学前に約1年をかけて、異文化の中で生活し、他者のために働くことで、プログラム参加者は国際感覚を身につけ、公共心を培える。それはのちのプリンストンの学部4年の中で、他の学生に伝承することができる。また、高校時代の勉強一辺倒の重圧から解きほぐし、次なる学術の進展につながる。ギャップイヤーを経験した学生は、成熟した“オトナ”の新1年生を生み出すメリットがある」とある。地域コミュニティに属する活動であるため、個人の成長と内省の機会を与えられるといい、異文化スキルも身に着けられる。導入時は、教育者やOB、メディアも、プリンストン大の革新的な手法で学部生教育とこぞって絶賛した。大学側は近々参加者数を100人規模にしたいとしており、注目される取組みだ。今年度から東大に導入された新入学生（3,000人）向け「FLYプログラム」（選抜で11人）もこれをモデルとしている。

2012年9月12日付のニューヨークタイムズ(電子版)の教育面は衝撃だった。見出しは「Lang College Offers Academic Credit for Taking a Gap Year（ラング・カレッジがギャップイヤー取得で単位付与）」と明快。記事本文の書き出しは、「高大接続でのギャップイヤーという考えは、高等教育（大学）への移行の準備が整っていない高校生には魅力がある」とある。

大学はニューヨーク市内にあり、“都心型”大学でリベラルアーツを標榜（ひょうぼう）しているユージン・ラング・カレッジ（ザ・ニュー・スクール大学傘下）が、高卒者に1年間の海外ボランティアのギャップイヤー・プログラムを提供する教育系NPO「グローバ

ル・シチズン・イヤー（略称：GCY）」と提携したというニュースだった。

GY ラング・カレッジに入学した大学生がGCYに同行し、所定の活動要件を満たせば、1年後に30単位が付与され、帰国して晴れて2年生から学園生活をスタートできるというものだ。同じ米国プリンストン大学のギャップイヤー制度（ブリッジイヤーと呼称）は、“入学予定者”が途上国で社会貢献するプログラムで、1年後は入学して新1年生になる。

しかし、ラング・カレッジの場合は30単位が付与され「2年生」になるというところがミソで、画期的といえる。つまり、本格的な社会体験を意味するギャップイヤーを「大学1年間に受けるすべての授業の内容に相当」と大学側が認めたことを意味する。

いわば“構外”にいる学生を遠隔で監督していく立場のステファニー・ブラウニー学部長は、「ギャップイヤーは価値ある学習経験が多々あるが、それに単位を与えるわけでない。GCYの活動以外の課題も与える」と前置きしながら、「大学の学園生活を始めるにあたり、よい選択。いわば本格的なゼミと1年生のライティング（文筆向上）授業に匹敵」として進級させると言う。このプログラムは大学教育を変革するとして、今年2月には、社会起業支援の“総本山”である米国・アショカ財団から、今年度の「高等教育イノベーション賞」を受賞している。

また、南アフリカの名門ステレンボッシュ大学大学院が「ギャップイヤー・プログラム」を創設した。

特にビジネススクールは、世界的に見れば、アフリカの最南端という地理的不利にもかかわらず、研究の質が高いことで知られている。海外からの留学生率も10%を超えていて（東大：学部1.7%、大学院13.6%）、世界標準に近づく努力をしている。このステレンボッシュ大学のビジネススクール（運営は大学学内ベンチャーのエグゼクティブ・デベロップメント社が受託）が2011年から「起業家精神とマネジメントでのギャップイヤー・プログラム」を立ち上げた。履修した専修学生に、なんと「ギャップイヤー修了書」を授与しているのだ。この10ヵ月プログラム（23万円）はちょうど昨年12月に2期目が終了し、今年から3期生が入学してきた。大学のサイトには「起業家になるために、ギャップイヤーを活用しよう！」とある。

“ギャップイヤー発祥の国”「英国」からのレポート

井本 かおり (JGAP ギャップイヤー総研客員研究員 ロンドン駐在)

「ギャップイヤー」発祥の国、英国から最新情報をお届けします。それは、英国にはギャップイヤー・システムが数十年定着していることです。

「社会体験（ボランティアや課外留学や旅）や就業体験を評価する文化がそこにある～英国のギャップイヤーの目的とその成果」

イギリスではギャップイヤー・システムが何十年前前から定着している。

毎年高校卒業生の約10%が一年間（厳密には9ヶ月から14ヶ月）のギャップイヤーを取り、その期間自己啓発、人間形成、そして異文化を経験するために費やされる。

大学側や企業側としても、ギャップイヤー経験者を評価する傾向にある。なぜならば、一年間という長い休みを有意義に計画的に過ごすことにより、多くのメリットが学生生活や就労生活に反映されることが実証されているからである。そして何より、社会体験（ボランティアや課外留学や旅）や就業体験を社会が当然のように評価する文化がある。

ただし、大学の専攻が数学、物理、医学、建築学科への進学を予定する学生においては、ギャップイヤーを取る事が比較的少ないと、インペリアル大学生物学教授のレロイ氏は言う。

その理由としては集中力の散漫、公式や知識の低下、それに医学・薬学部や建築学科の経済的な負担が挙げられる。

そして、ギャップイヤーを取る学生のメリットとしては、自己の自立や自信につながるとブリストル大学在学中のマホアジさん（20歳）は言う。

彼女がギャップイヤーで経験したアフリカ・ガーナのHIV（エイズ）病棟でのインターンは、人生において大変得難い貴重な経験であったと語る。

さて、それでは受け皿である企業側の評価はどうか、GLSA（クレディリヨネ；アジア系金融）で長年リクルートに関わるウォーリー氏に話を聞いてみた。

ウォーリー氏によると、「ギャップイヤー経験者は、自信があり自己本位ではなく、グローバルで自立し、臨機応変で就労環境に馴染みやすく協調性がある」と言う。

また、イギリス系財閥で香港を拠点とするスワイヤーグループのスワイヤー氏は、グローバル人材をリクルートする上で大変重要視される“異文化の理解力”やコ

ミュニケーションが彼らの逸材であると強調する。

例えば、毎年1000人以上の中から5～6人の経営陣を選考するに当たり、面接中に面接官とギャップイヤーの話で盛り上がり就職が内定した例もあったと言う。

ただし、最近多くのギャップイヤーエージェントが主催するホリデーキャンプ的な企画では、大部分をお膳立てされてしまう事により折角のチャンスがいかされず、考える力を養うという本来の意図から逸脱されてしまうことも懸念する。

ギャップイヤーが普及するイギリス、受け皿でもある大学側の理解や企業側の期待もある中、この一年をいかに有意義に、そして自分の将来に結び付けるか、そしてギャップイヤーをいかに時間効率よく計画的に利用するかが学生の今後の課題であると思われる。

最後にAAM（アバディーンアセットマネージメント、ペンションファンド部長）のデラフォース氏は、「ギャップイヤー制度利用の片鱗として学生には是非ともボランティアやチャリティーを経験してもらいたい。そして行先のコミュニティに何らかの寄与を施すことも忘れないでほしい。」と語っている。

ギャップイヤー海外事情（米国編①）

湯上 千春（JGAP ギャップイヤー総研客員研究員）

これまでJGAPでは「ギャップイヤー海外情報 米国編」として最近の米国でのギャップイヤー事情について取り上げてきた。ギャップイヤーが社会に浸透している英国に比べるとまだ限定的ではあるが、米国でもギャップイヤーは確実に広まっている。まずここでは米国の大学でのギャップイヤーの捉え方についてこれまでの「ギャップイヤー海外情報 米国編」で紹介してきた内容を少しずつ紹介する。

1. 米国でも進むギャップイヤー志向

ギャップイヤーの本場と言えば早い時期から広く学生にも社会全体にも浸透している英国であろう。米国では英国ほどはまだ社会に浸透してはいない。しかしギャップイヤー取得者も主流派ではないにせよ、米国のトップクラスの名門大学でも学生がギャップイヤーを経験することを積極的に推奨している。米国でもプログラム及び各種サポートを提供している大学や団体が増加している傾向がある。

2. 名門大学によるギャップイヤー推奨

例えばTIMES誌（電子版）には「大学に直接入学しない権利が魅力を増してきた」というタイトルで記事が掲載されている。入学延期制度を取り入れる大学の出現によって、これまでのように高校を卒業してストレートに大学入学することが目指されるだけでなく、様々な経験をしてから大学に入学することが米国でも重要視される傾向にあるというのだ。米国で歴史ある名門ミドルベリー大学、ノースカロライナ大学でもギャップイヤー取得の学生の成績はギャップイヤー非取得者よりも高いという統計がある。難関プリンストン大学でも9か月間のギャップイヤー・プログラム制度が導入されている。

（1）

さらに大学のプログラムだけでなく、ギャップイヤーを希望する入学予定者や学生へのピア・サポート体制が学生主体で整っている大学もある。ハーバード大学ではギャップイヤーを経験した学生が中心になり希望者の相談、情報提供を行っている。同大学では1960年代からギャップイヤーのバーンアウト（燃え尽き）防止、修学の向上効果を認めており、入学予定者にギャップイヤー取得を推奨していることで知られている（2）。

また大学が推奨しているのは入学前のギャップイヤーだけではない。難関大学であるハーバード・フォード大学のキャリアセンターでは卒業後にギャップイヤーを経験した多彩な人達による在学生のためのパネル・ディスカッションが行われている。入学前や休学中だけでなく、卒業後にギャップイヤーを経験することも進路を考えるための重要な選択肢として理解されているようだ。（3）

110年の歴史ある名門コネチカット大学の大学新聞「デイリーキャンパス（電子版）」ではギャップイヤーがテーマとして取り上げられ、学生の将来に有効なポテンシャルを持つものとして議論されている。高校から大学に入学する期間がその後の人生に重要であるにもかかわらず、何に興味があって何を勉強したいか自分でもわからないままに大学出願する学生が多い。しかし大学とはそもそも入学後から何を勉強するのかを探る場所であるべきなのかという疑問を投げかけている。（4）

3. 世界における市民意識を育む一環

またミシガン州立大学では入学予定者のための短期ギャップイヤー・プログラムで2週間の南アフリカでのセミナーを取り入れている。異文化に身を置いて世界の問題について思考する体験がその後の大学生生活に良い効果を与えると捉えられている。（5）

さらにグローバルな視野を持って地球を一つの社会と看做してその一市民であるという感覚を学生が身につけて社会を改善していくことのできる人になるための教育の一環としてギャップイヤーに着目している歴史ある大学もある。ノースカロライナ大学チャペルヒル校では入学予定者から選考された学生に半年間、仕事、旅行、奉仕活動を組み合わせた国際的なギャップイヤーに対して7500ドルの奨学金を提供している。この制度は、教務課と同大学の150年の歴史を持つ学生支援機関との共同で運営される。ここでも前述のハーバード大学のようにギャップイヤー経験学生で構成された団体による相談などのサポートが用意されているから頼もしい。（6）

こうした、元々は英国を中心としたギャップイヤーの慣習が米国でも注目されている傾向をワシントンポスト電子版も取り上げている。大学側が入学延期制度を取り入れることによって、高校を卒業した入学予定の学生がギャップイヤーで様々な経験をしてから大学に入れるように入学を待ってくれるようになる。高等教育研究所のデータによると2011年は1.2%の新入生が入学延期制度を利用と推計している。（7）

但し、こうした支援はすべての大学でまだ整備されているわけではなく、大学以外の団体が提供する様々なギ

ギャップイヤーのためのプログラムや支援も増加している。しかしインターネットの情報も様々な団体が教育目的以外に提供している場合もあるため、利用するには安全のためによく注意を払って信頼できる団体をリサーチする必要がある。

Reference : JGAP ホームページ掲載記事

- (1) ギャップイヤー海外情報 米国編 2012. 10. 06
TIMES 誌 (電子版) 2012. 10. 05
- (2) ギャップイヤー海外情報 米国編 2012. 07. 15
ハーバード大学就職課
<http://www/hcs.harvard.edu/gap-year/index.html>
- (3) ギャップイヤー海外情報 米国編 2012. 11. 08
ハーバー・フォード大学キャリア・デベロップメントオフィス
<http://cdoapps.haverford.edu/resources/events/index.php?caIID=799>
- (4) ギャップイヤー海外情報 米国編 2013. 03. 21
デイリーキャンパス (電子版) 2013. 03. 05
<http://www.dailycampus.com/commentary/opinion-gap-year-potential-could-offer-students-a-lot-more-1.3004035>
- (5) ギャップイヤー海外情報 米国編 2012. 09. 06
ザ・クロニクル誌 (電子版) 2012. 09. 03
- (6) ギャップイヤー海外情報 米国編 2012. 02. 14
ノースキャロライナ大学教務課:
<http://www.admissions.unc.edu/globalgap/>
- (7) ギャップイヤー海外情報 米国編 2012. 10. 13
ワシントンポスト (電子版) 2012. 10. 12

ギャップイヤー海外事情（米国編②）

湯上 千春（JGAP ギャップイヤー総研客員研究員）

米国の大学プログラムやサポート制度が導入されて、ギャップイヤーが注目されてきていることについて米国編①で触れた。米国ではさらにギャップイヤーはキャリアの選択肢の一部としても捉えられてきているようだ。ここでもこれまでJGAPで発信してきた「ギャップイヤー海外情報 米国編」の内容をいくつか紹介する。

1. キャリアの一つとしてのギャップイヤー

英国ほどはまだ浸透していないが、米国でもトップクラスの大学をはじめギャップイヤー取得することを推奨する大学が増えてきて、学生の人気も高まってきている。さらにギャップイヤーは米国では高校を卒業して大学で勉強したいことを見つける単なる架け橋としての意味合いに加え、キャリアの選択の一つ、そして将来のキャリアに繋がる重要な社会修行の期間としても捉えられているようだ。

2. 教務課のみならず就職課がサポート

高校卒業後にギャップイヤーを取得して大学入学前に様々な経験をするような入学を延期してくれる制度のみならず、大学の在學生にもギャップイヤーは人気となっているようだ。教務課だけではなく、就職課も情報を提供したり、セミナー開催するなどギャップイヤーのサポートに力を入れているようだ。

例えば、全米トップクラスの名門ペンシルバニア大学では就職課（キャリアセンター）が同大学公式ページ上でギャップイヤー・プログラムの紹介欄を設けている。それによると在學生に1年間あるいは2年間のボランティアや地域奉仕活動プログラムに参加することが選択肢として人気となっている。就職課では教師、弁護士組織、医療、環境保全など様々な機会があるようだ。在學生のために Teach For America などの受け入れ先のリストが紹介されている。在学中および卒業後にギャップイヤーを取得することはキャリアの一つの選択としても捉えられてきているようだ。（1）

またスタンフォード大学医科大学院では、卒業生でギャップイヤーを経験した人達が医師を目指す学部学生に向けて自分達の体験を共有するセミナーに参加し、その様子がビデオ公開されている。この「メディカル・スクール・ギャップイヤー・パネル」セミナーの主催者も大学の就職課（キャリアセンター）であり、前述のペンシルバニア大学のようにギャップイヤーを一つのキャリア、また将来のキャリアに繋がる期間として捉えているようだ。セミナーでは卒業生は、1、2年は親元を離れて社会修行することを勧め、また成績に加えてギャップイヤー

一自身が将来のキャリアに有利であるという内容が話されている。ここでも単なる高校から大学への繋ぎ期間というより将来に就く仕事と密接にリンクして有利なものであると捉えられていることが窺える。（2）

3. 社会貢献、社会修行としてのギャップイヤー

ギャップイヤーには、学生の自主的な活動である「プラン」と、大学や公共機関による「プログラム」がある。ギャップイヤー期間での経験から意識が変化して招来の進路に影響するケースもあるようだ。例えば全米20都市の学校の子供達の指導をする若者を派遣するアメリカ・コー（AmeriCorp）の全米社会貢献プログラムと提携する民間団体 City Year に応募した学生がいる。教師の補助、放課後プログラムに関わることでこれまでの自分の恵まれた環境に気づいて意識が変わり、その後、大学で公共政策を学んで修学意欲が湧いて様々なことに参加するように変化しているケースがある。City Year は大学に学費、生活費補助の支援、またこうしたアメリカ・コーなどのプログラムを修了した学生は全米約90の大学が経済的なサポートを提供し、中には授業料の半分を補助する大学もある。（3）

ギャップイヤー期間に経験したインターンシップによって、その後の自分が本当にやりたいことが明確になって大学で勉強したいという思いが高まって学業に熱が入るといったケースもある。（4）

米国ではギャップイヤーとは単なる留学や旅行をするだけでなく、「有期の仕事」の一つとしてギャップイヤー取得すると捉えられており、それを大学側や大学と提携した民間団体が強かにサポート体制を組んでいるようだ。

米国編①、②とこれまでJGAPで発信してきた「ギャップイヤー海外事情（米国編）」を少しずつ紹介してきたが、米国でもギャップイヤー人気が高まってきていることが窺える。米国の世界最大級で若者向けの音楽・エンターテイメント・ブランド「MTV」が2013年5月・6月に高校卒業後、大学にすぐに入学せずにギャップイヤーを取得する若者のドキュメンタリーを制作する。そのために該当する高校3年生を募集し、応募する人は自分の自

己紹介とギャップイヤー計画をビデオにして送ることが条件である。(5)

ただし、流行や人気だから無謀にギャップイヤーを取得するのではなく、大学での信頼できるアドバイスと支援を得て、支出する予算をしっかりと計画を立て、安全面や保険についてもよく調べて、ギャップイヤー取得する際に何を考えて、どういう準備をするべきなのかをきちんと把握することが今後、重要である。

Reference : JGAP ホームページ掲載記事

- (1) ギャップイヤー海外情報 米国編 2012. 11. 19
ペンシルバニア大学のキャリアセンター：
<http://www.vpui.upenn.edu/careerservices/undergrad/servicegapyearprograms.html>
- (2) ギャップイヤー海外情報 米国編 2012. 11. 25
スタンフォード大学メディカル・スクール
<http://studentaffairs.stanford.edu/cdc/services/video-gap-panel>
- (3) ギャップイヤー海外情報 米国編 2013. 08. 13
内閣府資料： アメリ・コーの概要：
<http://www8.cao.go.jp/youth/suisin/jiritu/02/siry02-3.html>
- (4) ギャップイヤー海外情報 米国編 2013. 08. 14
- (5) ギャップイヤー海外情報 米国編 2012. 02. 23
米国 MTV :
<http://www.mtv.com/news/articles/1701022/taking-gap-year.jhtml>

ギャップイヤー海外事情（英国編）

藪内 達也（JGAP ギャップイヤー総研 客員研究員）

これまで JGAP では「ギャップイヤー海外情報 英国編」として最近の英国でのギャップイヤー事情について取り上げてきた。英国は比較的、ギャップイヤーが社会に浸透している場所である。ここでは、英国のギャップイヤーに対する考え方や実例を紹介していく。

1. 英国ギャップイヤー取得者の現状

英国の大手旅行保険取り扱い会社の調べによると、英国国内で年間 25 万人にのぼるギャップイヤー取得者（英国の学部大学生総数は約 130 万人、3 年生大学が多いので一学年は 1 万人強と推定される）の半数は、大学入学前の高校卒業生であることが分かっている。

A-level 資格（資格試験の一種。一般に日本の大学の一般教養レベルの内容が含まれる）を持つ高校生の両親への調査では、35%の親が「ギャップイヤーは、子供にとって価値ある成功可能性 (worthwhile prospect) を秘めており、勤労体験や外国語習得を支援したい。そして、履歴書 (CV) を向上させると思う」と回答した。ギャップイヤーは、親元・教員から離れた就業体験・社会体験であり、いわば個を確立するための“社会修行”と捉えることができる。そのため、ギャップイヤーがよき“慣習”から、“高等教育人材育成装置”と認められる過渡期と考えることができる。

また、大学入学前にギャップイヤーを取得する人が、総人数の 3 割を超えているのには、理由がある。まずは、わけもわからないうちに、「どの大学で何を勉強するか」を選ぶ難しさである。ギャップイヤーを取得すれば、たとえば 1 年間働くことによって、学費の工面に困らずに済む。また、仕事に就くということはどういうことかを知ることができるし、それゆえ、将来職場環境で生じる困難に対し、若いうちから心の準備もできる。

ここでは、大学入学前のケースのみを取り扱ったが、このように英国では既に、「ギャップイヤー」という言葉、概念が市民権を得ているのである。

2. ギャップイヤー取得を後押しする環境

英国が「ギャップイヤー先進国」であるゆえんの一つに、ギャップイヤーの取得を後押しする環境が整っていることをあげられる。

たとえば、北アイルランドに位置するアルスター大学。2 万人規模のマンモス大学では、キャリア開発センターが、提携旅行会社の「英語をタイで教える“ギャップイヤー”有給プログラム」の紹介をしている。

このプログラムでは、1 月最低 600 ポンド（約 9 万円）

の収入が得られることができ、かつプログラムを通じて TEFL（外国人に英語を教える資格）が取得できる。更に研修と宿泊施設もついているのだ。

このパッケージには、オプションで選べるプログラムもあり、就労体験だけでなく参加者同士の交流等も楽しむことができる。

注目すべきは、英国ではこのような「ギャップイヤー・プログラム」に対し、大学のキャリアセンターが関与し、学生や入学見込み者に情報提供しているということだ。換言すれば、「ギャップイヤー」もキャリア（真の意味で生き方・働き方の道筋）であり、日本のように民間企業への就職の便宜を提供するのが主務である狭い業務範囲とは明らかに違う。

もう一つ注目に値するのは、ギャップイヤーにはコストがかかり、富裕層が中心となって取得するものと短絡的に考えがちだが、そこは智恵と情報を駆使すれば、いろんな道があるということだ。ここで紹介したプログラムを使えば、幾らか費用はかかるが、場合によっては貯金することすらできる。

また、英国の大卒求人サイトでは「ギャップイヤー支援団体」の主要 50 団体のリストを掲示している。団体ごとに強い分野は異なっており（海外ボランティアやインターン、語学留学等）、それらから多様なアドバイスとプログラムを示されることも、英国がギャップイヤー先進国であることを示す事例となっている。

Reference: JGAP ホームページ掲載記事

- (1) ギャップイヤー海外情報 英国編 2013. 2. 16
- (2) ギャップイヤー海外情報 英国編 2012. 8. 19
- (3) ギャップイヤー海外情報 英国編 2012. 10. 11

ギャップイヤー海外事情（カナダ・中国・南ア編）

藪内 達也（JGAP ギャップイヤー総研 客員研究員）

これまでに、「ギャップイヤー海外事情」と題して、米国と英国の事例を見てきたが、ギャップイヤーを取り巻く状況は、もちろん他の国でも進展している。米国・英国に比べると、事例の数や浸透度合いは少ないが、カナダ・中国・南アフリカがどのような状況に置かれているのかについて、この節では検証していく。

1. カナダ

今やカナダは、大学を1年間通った後に、学生の3分の1が中退等で大学を中退する国である。カナダ最大の学生向けキャリア支援サイトでも、環境学部に進んだそのような1人の女子大生が紹介されている。

彼女は大学に入学するまでは「勉強が自分の人生の明確なステップ」と確信していたが、入学後に興味のない科目の宿題に追われる中で、「自分がなぜここにいるのかさえ分からなくなった」と言う。これは一例だが、彼女に似た境遇にいる大学生が、全体の3分の1を占める。

彼女は、「中退っていうのもばかげているけども、2年生に進んでいたらもっとばかげたお金の無駄使い」と彼女は言い切る。そこで、夏の3ヶ月間は、植樹関係の仕事に就いた。大学には戻りたいと思っているが、貯めたお金を海外で、人道的な分野で使いたいと思っている。

「私は学生にギャップイヤーをためらわずに勧めます。特に何を勉強したいか分からない場合は尚更です」と言うのは、クイーンズ大学就職進学課課長兼就職カウンセラーのポール・ボーマン氏。

元々カナダでは、アメリカと同様に、高校卒業後はストレートに大学進学する。しかし、ギャップイヤーの文化が根付いた欧州の考え方が両国にも飛び火してきているのが現状だ。今ではカナダでも、多くの大学が「入学延期許可」を出し、入学見込者へのギャップイヤー取得に協力的だ。大学によっては復学前に1年の海外留学を含むような橋渡しをする「ギャップイヤー・プログラム」まである。つまり、大学側が学生のサポートもしてくれるのだ。

このように、カナダでも本格的な社会体験（ボランティア・課外留学等）・就業体験を意味するギャップイヤーが、大学でのキャリア支援の1つになってきている。

2. 中国

日本以上に厳しい就職活動、雇用状況に直面している中国だが、ここ1年程でギャップイヤーに対する認識が広まりつつある。

まずは、中国関連情報サイト（サーチナ）の中で、中国人ブロガーが「日本のギャップイヤー（間隔年）」の内容が紹介されている。そこでは、欧米で敷衍しているギ

ャップイヤーの概念が、日本でも広まりつつあり、日本ギャップイヤー推進協会（JGAP）が設立されたことや東大がギャップイヤー制度を導入する案も紹介されていた。

また、昨年9月中旬には、国営テレビの「中国中央電子台」も、英語討論番組”Crossover”でもギャップイヤーについて30分間討論をした。番組内では、「まだ中国人は現実主義的で、ルーティーンから離れるギャップイヤーは稀だが、実際若者を中心に起こっている事象」と説明された。

他にも、別の番組でもギャップイヤーについて取り扱われたことがある。作家の孫東純氏が13ヶ月間、海外でボランティアに従事した体験を綴った「延長したギャップイヤー」がベストセラーとなり、若者の間で人気広がっていることが発端となったようだ。

3. 南アフリカ共和国

南アフリカのニュースサイトで、コラムニストが「ギャップイヤーは誰でも行けるわけではない」という刺激的・反語的な見出しで、現地を卒業したばかりの優秀な黒人女性を紹介している。

南アフリカの同人種間では、人に認めてもらうために良い成績を収めなければならない、という脅迫観念がいつも存在している。また、学費を捻出してくれた親の恩返しも含めて、良い成績を収めなければならないプレッシャーがある。「ギャップイヤーを取得して自分自身を試してみる」という選択肢自体がないと言いたげだ。優秀な成績の彼女の周りにも、同じように「必死に頑張っ安定した職を得る」という考え方をもった人が多いが、その他にも「ギャップイヤー」を取得し、自分の人生を切り開いた人たちとも話をして、「自己発見に身を投じる見返りは、初任給を受け取ることよりはるかに素晴らしいのかもしれない」と思うようになったとある。

Reference: JGAP ホームページ掲載記事

- (1) 海外ギャップイヤー カナダ編 2012. 11. 22
- (2) 海外ギャップイヤー 中国編 2012. 7. 17
- (3) 海外ギャップイヤー 中国編 2012. 9. 15
- (4) 海外ギャップイヤー 中国編 2012. 12. 29
- (5) 海外ギャップイヤー 南アフリカ編 2012. 12. 17

日本でのギャップイヤー活動タイプ

鬼頭 豊和 (国際文化青年交換連盟日本委員会 [ICYEJAPAN] 理事)
原 卓矢 (国際文化青年交換連盟日本委員会 [ICYEJAPAN] 会員)

日本人でのギャップイヤーはどんな活動をしているのか? どんなタイミングで行っているのか? etc...

本章は、ギャップイヤー経験者に対し、アンケートを実施した結果を踏まえながら、日本人のギャップイヤーの活動タイプを紹介する。

1. ギャップイヤー経験者アンケートを実施

ギャップイヤー・プラットフォームでは、ギャップイヤー経験者アンケート(以下、アンケート)を実施した。

近年、日本でも認知されてきたギャップイヤーであるが、概念も多岐にわたり、ギャップイヤー経験者へのアプローチが難しいのが現状ではないだろうか。

アンケートの回答は、ICYE/JGAP/JICA/NICE などのギャップイヤーの担い手を中心に実施した。アンケート概要は、以下の表のとおりである。

項目	概要
目的	日本でのギャップイヤー事例およびギャップイヤー経験前後の変化傾向の調査
調査方法	インターネット WEB アンケート
調査期間	2013年2月～2013年4月末
調査対象者	日本全国のギャップイヤー経験者 1か月以上、主生活とする学校や職場から離れて、ボランティアやインターンなど課外活動を行っていた日本人
抽出方法	ギャップイヤー・プラットフォームの担い手を中心に、ギャップイヤー経験者へアンケート回答を依頼。他Facebookなどで一般告知。
回答者数	76人 (男性50人、女性26人)
設問数	全16個の設問 (選択式回答、自由記述回答)

表1. ギャップイヤー経験者アンケート

2. ギャップイヤーを行った時期・期間

日本でのギャップイヤーを行った時期は、大学在学中での休学や留年を機会に行っていることが多く、社会人では、休職や退職を機会に行っていることが多い。(図1)

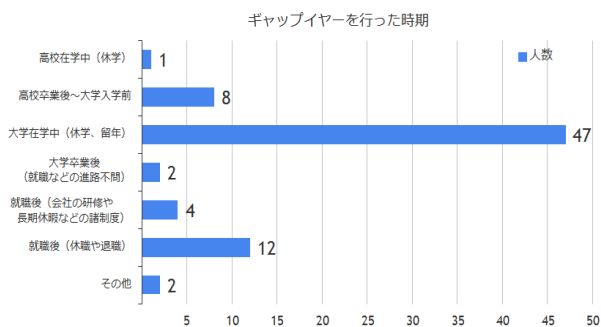


図1. ギャップイヤーを行った時期

ギャップイヤーを行うためには、学校や職場などの主たる生活環境から一定期間以上、物理的に離れた環境に身を置く必要がある。

一般的にギャップイヤー発祥と言われるイギリスでは、大学進学が決まった高卒性が入学前の数か月間に大学では得られない経験をすることが推奨されている。

ギャップイヤーを行う期間は、アンケートでは、6か月～1年間が一番多い結果となった。(図2)

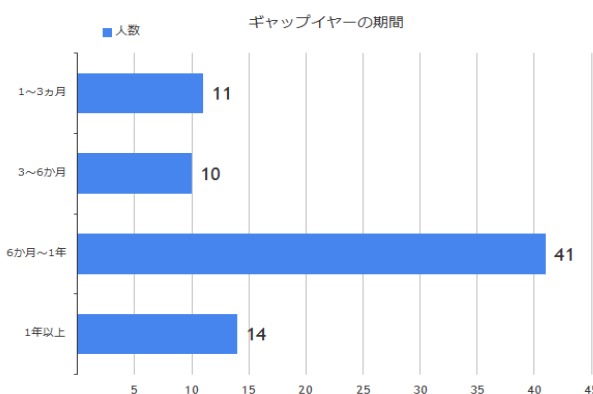


図2. ギャップイヤーを行った期間

日本では、3月卒業・4月入学または就職などと、学生時代にギャップイヤーのための期間を取るには、難しい現状がある。就職し社会人になると、さらにギャップ(休暇)を取るためのハードルが高くなる。実際に日本での有給消化率は世界でも低い。(注1)

一方で、日本でもギャップイヤーを肯定的に受け入れる傾向も出てきている。

秋田の公立大学法人 国際教養大学では、9月入学に対して、ギャップイヤー制度があり、所定の要件を満たせば、入学後単位として認定される。(注2)

企業では、ソニーの場合、2006年に入社日を内定者が最長で2年間自由に決められるフレックス採用が話題になった。合わせて、2012年には『「新卒」のルールを変えます』と表明し、「新卒採用においては、在学中の学生および卒業後3年以内の方を対象としています。就業経験の有無は問いません。卒業後の武者修行、歓迎します」と述べている。(注3) 企業においても、多様性を持った人材を受け入れる点において、ギャップイヤーを経験した学生に注目している。

3. ギャップイヤーをはじめた年齢

ギャップイヤーをはじめた時期は、10代後半から20代前半が多く、ほとんどが学生であった。(図3)

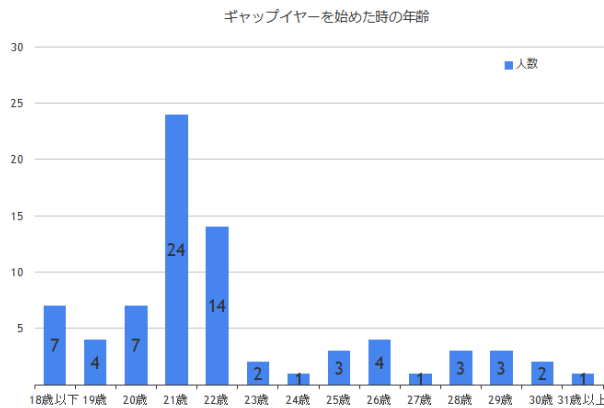


図3. ギャップイヤーを始めた時の年齢

4. ギャップイヤーを行った活動ジャンル・場所

ギャップイヤーで行った活動ジャンルは、ボランティアが一番多かった。(図4)(図5) 各々の活動ジャンルの詳細は後述する。

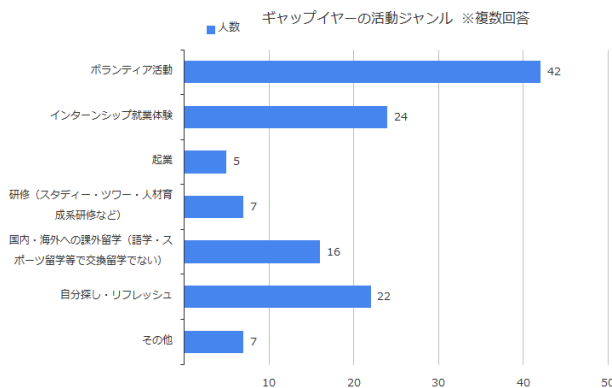


図4. ギャップイヤーの活動ジャンル

活動ジャンル	ギャップイヤーの活動期間			
	1~3か月	3~6か月	6か月~1年	1年以上
ボランティア活動	8	7	19	8
インターンシップ就業体験	1	5	14	4
起業	0	2	2	1
研修(スタディー・ツアー・人材育成系研修など)	2	0	4	1
国内・海外への課外留学(語学・スポーツ留学等で交換留学でない)	1	3	9	3
自分探し・リフレッシュ	2	3	16	1
その他	0	1	5	1

図5. クロス集計(活動ジャンル×期間)

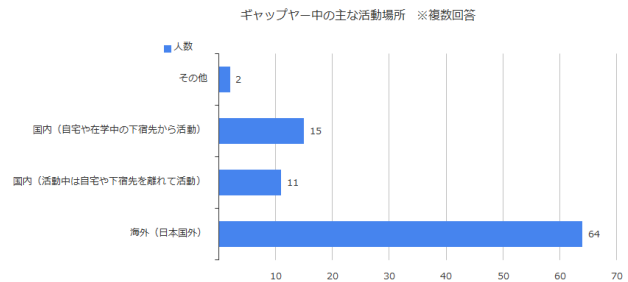


図6. ギャップイヤー中の活動場所

ギャップイヤー中の主な活動場所	ギャップイヤーの活動期間			
	1~3か月	3~6か月	6か月~1年	1年以上
国内(自宅や在学中の下宿先から活動)	0	4	10	1
国内(活動中は自宅や下宿先を離れて活動)	0	0	9	2
海外(日本国外)	11	8	33	12
その他	0	1	1	0

図7. クロス集計(活動場所×期間)

5. ボランティア活動

海外NGO、地域のNPOなどが提供するボランティアプログラムへの参加である。アンケートの回答では、一番多かった。ボランティア活動の本質は、自分の自由意志で取組むものであり、ギャップイヤーとの関連性も高い。

具体的な活動内容は、環境保護の活動から福祉施設の学習支援のサポート、学校で語学を教えるなど、高い専門知識が要求されない活動から、元々持っていた実務経験と専門知識を活かし、現地で支援活動を行うものが挙げられた。

国内での活動事例は、地域のまちづくりを担うNPOの長期プログラムや、東日本大震災に被災者支援ボランティアに関連のNPOに参加するといった内容が挙げられた。その他には、田舎の農村での農業活動や家庭教師のボランティア活動、日本に出稼ぎに来ている外国人が通う日本語教室で日本語を教えるボランティアに取り組む事例が見受けられた。

アンケートからの抜粋	
JICAの隊員として、キャンディにおいてテニスの指導を行った。彼の受け持つ生徒に対する指導・および彼のコーチ技術の向上を行った。	
NICEの中期ワークキャンプ、中長期ボランティア(インド)、その後海外放浪。帰国後は日本を知るため、世界遺産の2種類の地で国内ワークキャンプ。復学直前に、他団体の主催するスタディーツアーに参加。フィリピンの農村で参加型開発の現場に入り込む。	
被災地支援ボランティア。	
オーストラリアでホームステイとボランティア。	

6. 自分探し・リフレッシュ

世界一周などの長期旅行を自分で計画し複数ヶ国を周遊しながら、自身の見聞を広げる活動が多く見られた。旅すること自体を目的として行動し、諸外国の異文化の人と触れ合う。興味や関心で臨機応変に軌道修正する。

世界一周旅行をする人は、長期で物事を考え、必要に応じて軌道修正する能力に長けていると思われる。

アンケートでは、ボランティア活動や留学と異なり、短期間で移動を繰り返す分、1か所に留学に腰を据えて真剣に取り組んでいないのではないかという葛藤を持ったという回答も見受けられた。一方で、様々な環境に身を置く中で「中だるみ」をするヒマが無かったので、刺激に満ちて意欲が途切れなかったという点も挙げられた。

アンケートからの抜粋
「世界一周」という名目で、タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア、インド、エジプト、ヨルダン、イスラエル、フランス、モロッコを訪問。
総合商社に内定していたので、語学と国際感覚をつけるために3ヶ月間、欧州を訪問。内定した会社のドイツ法人を訪問し、代表者と懇談した。

7. 起業

休学期間中に、国内でシェアハウスの立ち上げや、ボランティア先の国で起業と言った活動事例も見受けられた。また、起業に求められる資質として、多様な経験、情熱、リーダーシップを培うためにギャップイヤーをした学生もいた。学生時代のギャップイヤー経験がきっかけで、民間企業に数年間勤務した後に起業した経験者もいる。

起業家や企業経営者や新規事業企画を目指す上でも、ギャップイヤーの経験は有効であると考えられる。想定外に対する環境適用能力、一歩先を見通す洞察力、ハードワークをこなす時間管理能力は、正規授業や研修だけではなく、多くは課外の社会体験から得られることが多いのではないだろうか。また、経営者が持つ哲学的な信念や事業を行う動機づけも、様々な社会経験を通して確立していくものと考えられる。実際に著名な経営者に休学や中退経験者が多い。

アンケートからの抜粋
休学をせずに、大学在籍中にベンチャー企業の立ち上げ。
起業して起業家向けのシェアハウスを立ち上げました。

7. 国内・海外への課外留学

大学生の場合、主に学校の留学制度で大学へ留学、自費で語学学校に学びに行く事例である。ホームステイ先や学校のクラスメートと生活を共にする中で、異文化に対する相互理解や新たな専門知識が身に付くことで多様性が養われ、視野が広がりやすい。また、私費で留学斡旋を行っている団体のプログラムを利用して海外の大学

に留学するケースも見られた。学生が海外に行くには、留学が一番身近に聞くのではないだろうか。

また、社会人の場合、企業を退職、もしくは休職して海外で学ぶケースも見られる。この場合、私費で語学学校または大学へ入学するケースが多い。

アンケートからの抜粋
日本の大学を1年休学し、アフリカのウガンダにある大学に留学。経営学を勉強する傍ら、ウガンダにおける農業の可能性を感じ、ウガンダ人と農場を立ち上げた。

8. インターンシップ就業経験

ギャップイヤー中に中長期のキャリア形成を目的にしたインターンシップ就業体験である。期間も数か月以上のフルタイム勤務に及ぶもので一時的な就職とも言える。

その点においては、新卒採用の学生に募集する短期のインターンシップ(1DAYや1WEEKなど)とは異なる。また、海外でのインターンシップを行うプログラムを通じてNPOや現地企業で働くケースも見られる。

アンケートの回答からは、経済産業省の「グローバル人材インターンシッププログラム(注4)」に参加し、海外の現地企業で就業経験を積むものから、自分で臨む分野の仕事ができそうなベンチャー企業を探し働くなど、希望する業界の見習い社員として、就業経験を積む事例が挙げられた。

学生のうちから、ギャップイヤーにより、キャリアの経験を積み上げておくことは、就職活動やキャリアアップにおいても有益になるであろう。

アンケートからの抜粋
経済産業省グローバル人材インターンシッププログラム参加。派遣国の企業に派遣され、商習慣、登記手続き、貿易実務についての研修を受ける。
2ヶ月のバングラデシュへのインターンシップ
熱海で活動するまちづくりNPOにて、1年間の長期インターンシップに参加。
6月～9月 知人が立ち上げた会社にて半居候、10月～翌年3月 知人の会社を離れ、面白い経験ができないか色々な人材派遣会社の面接にトライ。フルタイムで通信会社の営業事務に従事。

9. 企業研修

企業研修の場でもギャップイヤーの趣旨に関連した事例があった。企業にとってもグローバル人材の確保と育成が企業にとって重要な課題と位置づけられている。社員が日常の業務から離れ、海外ボランティア活動への参加し、異文化での協業体験を培う機会が出てきている。

アンケートからの抜粋
会社の海外研修としての社内公募に応募し、障がい者学校でボランティアとホームステイ。
ルーマニアの研究機関に勤務。

10. アルバイト

ここで挙げるアルバイトは、学生がギャップイヤー中に必要な活動資金を自分で捻出するために行った事例が多くを占めた。1年の休学期間中の前半半年はフルタイムのアルバイトでまとまったお金を稼ぎ、後半半年で海外でのボランティア活動、世界一周に行ってくるといった内容が見受けられた。アンケートに設けたギャップイヤーを行った際の課題として、一番多かったのが経済的な理由であった。

アンケートからの抜粋
塾講師のアルバイト、大学受験用の塾で、英語と数学を教えました。
最初の半分の期間で親からの金銭的な自立を目標として、初めてのアルバイトをし、語学留学資金を貯めた。
学童保育のアルバイト、市内小学校併設の学童保育施設でアルバイトをしました。

11. 今後の展望

今回のアンケート実施は、母数が少なかったものの、日本では稀にみない試みであった。ICYE/JGAP/NICE/JICAと主に10～20代前半の学生および、海外でのギャップイヤー事例が多く集まった。

今後、まだ数が少ない20代以降の社会人や日本国内でのギャップイヤー事例にも注目される。

(注1) Expedia, Inc 有給休暇国際比較調査 2012
<http://www.expedia.co.jp/corporate/holiday-deprivation2012.aspx>

(注2) 公立大学法人 国際教養大学 9月入学とギャップイヤー制度
<http://www.aiu.ac.jp/japanese/admission/old/admission0303.html>

(注3) ソニー株式会社 採用情報 「新卒」のルールを変えます。
<http://www.sony.co.jp/SonyInfo/Jobs/newgrads/concept1/contents1.html>

(注4) 経済産業省 「METI グローバル人材育成インターンシップ派遣」に参加するインターン生等の募集を開始します
<http://www.meti.go.jp/press/2012/05/20120511001/20120511001.pdf>

第2章 第9節

ギャップイヤー経験をしたフロンティア（先駆者）達の言葉

藪内 達也（JGAP ギャップイヤー総研 客員研究員）

2011年からスタートしたJGAPのエッセイ欄「フロンティア・フォーラム」（<http://japangap.jp/essay/>）には、現在120稿を超えるエッセイが掲出されている。その中の22人の寄稿者から、ギャップイヤーや海外に飛び出すことに関して表現されている箴言（しんげん）を拾ってみた。そこから何を読み取れるか。キーワードは「自分の頭で考えること」と「自分の行動は自分で決める」、つまり主体性の大切さではないだろうか。（時系列・肩書は掲出当時）

「人には一日24時間しかない。この時間をどうやって使うかは私次第、あなた次第だ。そしてこの24時間のサイクルは毎日続くが、いつどのタイミングで終わりが来るか分からない。だからこそ、やりたいことはやったほうがいいし、夢中になれるものがあるならそれに突き進めばいいと思う」

濱田真里 早稲田大学教育学部社会科社会科学専修5年/世界を舞台に働く女性のリアル情報インタビューサイト「なでしこVoice」代表
「海外で働く日本人女性50人のインタビューをして想ったこと」
(2011.10.24)

「たくさんものを見て、たくさんの人に会って、たくさん考えることで、視野は広がり、新しい世界が開けてきます」

もりぞお
無職 アジア就活中（2011年11月現在）

「なぜ、私は大企業を辞めて、世界一周旅行なのか？」（2011.11.15）

「悩み続けることは悪いことではない。ただ、動き出すことを恐れているは何もなせないことを私はこの旅でひしひしと感じている。なぜならば、行動を起こすことでのみ、「社会を変える」ことは始まるのだから」

八木駿祐 関西学院大学総合政策学部4年生（休学中）
「『社会を変える』に出逢う旅の半年記」（2011.11.29）

「闇雲にレールから外れることを勧める気はないですが、求めるものがあるなら、今の状況を飛び出すのも選択肢の一つとなります。リスクは、把握できればそう怖いものではありません。不安なら「体験」から入るという手もあります。即海外移住ではなく、まずは旅行から、というふうに」

秋元悠史 海士町・島前高校魅力化プロジェクト及び
隠岐國学習センタースタッフ

「なぜ、私は新卒で就職したIT企業を一年半で飛び出して、島根県・海士町に移住したのか?!」（2011.12.08）

「大学は「最低4年で卒業できる」ものであって、「4年で卒業すべき」ではないということです。もしかしたら海外に出てみると「4年で卒業すべき」は非常識であるかもしれません。最低4年だと思えば、人生を楽しむためなら1年くらい遅くなくても良い気がします。休学してもよいし、他のきになる勉強をするために留年してもよいし、海外に出てみてもよいし、国内を旅しても、インターンシップしてみてもよい。1年もあれば、多様な事ができます」

杉山佳範 大阪府立大学大学院理学系研究科2年（休学中） 情報数理学専攻 知識システム研究室
「常識を打ち破り、選択しろ！」（2011.12.14）

「大切なことは、自分の心に従い、自分で考え決め、そこで何をして見て学んだかだと思います。生き方は十人十色。自分の生き方を考え、最高の人生を選び、創って下さい」

豊田浩樹 日本大学文理学部4年
「3大学8年“寄り道”重ね、私は教師になります」（2011.12.30）

「“決まったレール””は自分の思い込みで、実際は自分から動けば、いくらでも自分で“人生のレール””を引くことができる」

豊永奈帆子 早稲田大学国際教養学部4年
「留学で変わった私の人生」（2012.1.19）

「ギャップイヤーというのは手段であって、目的でも目標でもありません。まずは自分のやりたいことを探し続けること、これを怠ってはいけません。（中略）本当にやりたいことを探し続けること、そしてやりたいことを見つけた時に、実現できるように自分を磨き続けること、この二つがとても大切です」

太田英基 サムライバックパッカープロジェクト（世界一周中）
「起業・退職し、“五年後の描いた自分”に近づくための旅」（2012.1.24）

「別にオランダに来る必要はありません。ですが、せめて選択肢として日本の大学以外も考えていて欲しいと思います。英語がちょっとできて、面接で自分の勉強したいことを語ればそれでいいんです。留学に関して「入るのが難しそう」「学費がすごく高そう」という神話はそろそろ捨てて、情報を集めてみませんか？(中略) やりたいことを住みたい場所でできてもいいと思います。日本に居続ける必要って、特に何かありますか？」

五十嵐彰 University College Utrecht Junior (オランダ)

「僕が立教辞めて、オランダの大学に編入したワケ」(2012. 2. 2)

「最初の海外や一人旅は、深く考えず、ガイドブック片手に“えい！”ってチケット家って飛び出しちゃって下さい。人生変わります。」

青木優 明治大学国際日本学部4年(休学中)

「約7ヶ月の世界一周を終えて」(2012. 2. 15)

「日本特有の『右にならえ』という精神が強すぎて、日本人は自分と向き合う機会が少ないように思う。だから一度今いる場所から離れてみて、真剣に自分と向き合ってみてはいかがだろう。離れてみることによって、自分がどういう場所にいたかが分かるし、外から今までの自分を見つめることができる。Gap Year は、そのためのすばらしいきっかけになるはず」

成瀬勇輝 早稲田大学政治経済学部5年

「“インターネット的”に生きてみる」(2013. 3. 8)

「刺激の少ない日本の“空気”に流され、本質を掴めなくなるのではなく、世界の“風”を感じ、能動的に自らを高めることが何より必要だと信じている。(中略) 変化を恐れず、まずは“えい！”と世界に飛び出してはどうだろうか。出て何をするかは皆さん次第。出た暁には日本では知りえなかった新しい“世界”が待ち受け、何かを学ぶことができる」

黒住宗芳 オックスフォード・ブルック大学(立教大学経営学部3年休学中)

「僕が休学して留学したワケ～日本の“空気”ではなく世界の“風”を感じよう！」(2012. 3. 23)

「可能性は自分で広げていくものだと思っている。小さい枠に捉われず、外に一步を踏み出していくことが大事ではないだろうか。今回の留学もそうだが、もし車椅子を使わなければ来られなかったと思う。しかし、うまく使えば、今こうやってひとりでイギリスで一人でも生活できている。最初から「僕には無理」ではなくて「どう

すれば可能になるか」を問うことが大切だと僕は思う」

寺田湧将 関西学院大学社会学部4年=休学中

「障害者である僕に未来はない、可能セもない。僕は自分の人生を諦めているんだ…」(2012. 4. 2)

「一年間卒業を遅らせることで、失うものは少なくない。多くの人にも迷惑をかける。しかし、もし自分が心の底から挑戦したいと思えることがあるならば、周りの人の理解に感謝して、一步を踏み出すべきだ。そこまで意を決したものであれば、「休学」を選択するのも悪くはないと今は考えている。」

宇佐美峻 慶應義塾大学3年=休学中

「私が“スポンサー”をつけて、1年間世界を旅しようと思った理由」(2012. 4. 26)

「周りがこうだから自分も、ではなく、きちんと自分の頭で考え、出した答えに素直に従った方が公開しません。もし自分のやりたいことをするためにギャップイヤーを取る必要があるならば、迷わず取るべきです。そこでたとえ満足いく結果が得られなかったとしても、一步踏み出してチャレンジしたという実績が自分の中に残ります。それは次に何かをなす際の糧になると思います。」

水野真吾 青山学院大学 国際政治経済学部4年(米国カリフォルニア州サンディエゴに私費学部留学)

「やりたいことを思い切りやる～留学で考えたこと」(2012. 6. 1)

「僕は、自分のcomfort zoneの外に踏み出すことを、今の若い人にも恐れなくてほしいと思う。快適さの檻(おり)に閉じこもってはいは体験できないことを、失敗や挫折も含めて積極的に体験して欲しいと思う。そして、そこで自分の信念を育(はぐく)み、思考や感覚を研ぎ澄ませ、自分という存在を深く知り、のちに自分が望む舞台上で人生の勝負をして欲しいと思う。」

やす シンガポール在住

「若者はcomfort zoneを越えよ！～彼女の葬式で自殺を考えた人間が、北米白人社会に挑戦しながら思ったこと」(2012. 7. 5)

「一度何かにチャレンジして、その可能性を実感したら、また次何かに挑戦したいと思える。一度この好連鎖を経験したら、きっとこの良い循環から抜けるのが惜しくなるだろう。目の前の、どんな小さなチャレンジだっていい。この勇気を出してチャレンジ→大きな可能性を見るサイクルを経験することに意味があると思う」

松井鈴果 早稲田大学政経学部3年

「失敗や間違いが怖いアナタへ～通学からのNGO活動、留学、そして世界一周～」(2012.7.21)

「自分の直感に素直に従ってみることだと思います。何かを始める敷居はとにかく低く。(中略)すべては自分が始めないと始まりません。気になった者はどんどん手を出して、その中から継続できるものを見つければいいんです。」

前田健太 岡山大学経済学部経済学科4年生。ニューヨーク州立ストーンブルック大学に交換留学中

「二週間の“サンフランシスコ語学留学”をきっかけに変わった自分」(2012.9.1)

「2年間の専門学校で学んだこと、3年半の社会人生活で学んだことは決して無駄にはなっていないと思っています。それは旅をしていて常に感じるので、人生においての“寄り道”はやっぱり重要だな、と思います。そして、寄り道のタイミングは可能性のある若いうちがいい。できれば20代」

江里祥和 世界一周中

「日本ではリスクが高い“ギャップイヤー”について思うこと」(2012.10.28)

「行動でしか、人は行きたいところには行けない。そして行くと決め行った先に、自分には予想もできない「出会い」が待っていて、次の行動に導いてくれる。それが宝物なのだ」

村上由里子 青年海外協力隊としてアフリカのルワンダに派遣中

「Design Yourself. あなたの色で、あなただけの色を～アフリカでゲストハウスを造る私が、こうしていられる3つの理由」(2012.12.11)

「とにかく若者は絶対日本の外に目を向けたほうがいい。それによって見えてくる世界、形成される世界観というのはきっと将来役に立ちます。物事を考える上で、思考のバックグラウンドは広く、深いほうがいい。より相対的に、より多角的に、より柔軟に考えることができるから」

小山修平 eConnet Japan (株) 代表取締役

「海外を旅し、世界を知り、日本を外から見ることの大切さ」(2013.1.1)

「日本での「普通」のは当たり前だけど、他の国では「普通」とは限りません。先入観という殻にこもるのは、もったいない。本当にやりたいと思うことがあって、覚悟があるなら、どんどん挑戦した方がいいです。決めるのは自分。納得した答えなら、どんなに辛い時も力が湧いてくるし、その結果、誰かにもきっと役に立てる人間になれるのだとそう信じています。」

八田飛鳥 インドで起業準備中

「今日が、人生最後の日だとしたら、あなたは今日と同じを生きたいですか」(2013.1.22)

※尚、肩書きは全て、エッセイ掲載時点のもの。

ここに延べ22人のgap year takerあるいは、gapper(ギャッパー:ギャップイヤー取得者)のメッセージを載せてみた。彼らのギャップイヤー取得時期や取得背景は、それぞれで大きく異なっている。大学在学中に取った人もいれば、仕事を始めてから取った人もいる。そして彼ら・彼女らが口を揃えて伝えたいのは、「自分の頭で考えること」と「自分の行動は自分で決める」ことの重要性と言えるだろう。周りの状況がどうなっているか、ではなく、自分が主体的に疑問に思うことや行動したいという気持ちを、彼らはそれぞれ内に抱え、自らの人生を切り開いてきた。このことは、日本の高校までの教育で沁み付いた「人と違うことをするとリスクが高い」という教えと対極をなすものだろう。今や、インターネットを使えばあらゆる情報を手にすることができ、それらを消費することで疑似体験をして満足を得られる時代になっている。しかし、ここに載せたギャッパー達の実体験というフィルターを通した言葉には、その一言ずつに重みがあり、説得力があるのではないだろうか。これからギャップイヤーを取得する人たちに向けて、gap year takerの言葉が後押しを手助けするものであってほしい。もちろん、その先には、社会が「空白」と最初からステレオタイプにネガティブに捉えるのではなく、ギャップイヤー経験から何を得たかに耳を傾ける寛容を持つ環境が必要なのは、言うまでもない。

第2章 第10節

ギャップイヤー経験者が乗り越えたギャップイヤーに関する課題

鬼頭 豊和 (国際文化青年交換連盟日本委員会 [ICYEJAPAN] 理事)

原 卓矢 (国際文化青年交換連盟日本委員会 [ICYEJAPAN] 会員)

本章では、ギャップイヤー経験者アンケートに頂いたギャップイヤーに関する課題を一部ご紹介する。

主な課題として「外部からの賛成／反対」、「金銭的問題」、「目的意識・活動中のモチベーション」、「周囲との遅れ・不安」、「その他」からなる。

1. 外部からの賛成／反対

- ・親(母)の反対が強かった。学費を自分で出してきたので、最後は父親に了承をもらい、休学届を出した。
- ・留学以外の休学について、大学の教授から反対を受けたこと。
- ・親や友人等、周りの人がとても寛大で、何一つ不自由がありませんでした。
- ・旅といった類のものは経験しなければ分かりえないものだし、口で説明するものは経験なしでは希薄だとも思えた。両親から反対は強いものだったが、旅に出れてよかったと思える。人生におけるモチベーションを得て、目的をもって日本に帰ってこれた。

2. 金銭的問題

- ・休学中の費用を全て自分で貯めなければならなかったため、いかに定額で海外に滞在し英語を習得するか、を編み出すまでが時間がかかりました。
- ・学業と運動も両立して、費用は家庭教師で稼いだ。
- ・経済的問題は後から働いていくだけでも返せると社会人になってより強く実感。今しかない、というタイミングで行動に移すことの方が重要。
- ・親が自分の意志に任せて後押ししてくれる立場だったことが一番支えだった。
- ・大学の休学費用は、自分が休学する時点で、ちょうど半期8万円に下げられたことが金銭的課題を解決する上で役立った。
- ・新聞配達の奨学生をやっていたので、何とか海外への費用をねん出できた。
- ・100万円以上のお金を要したため決断も難しかった。結局遅れるかどうかは自分次第なので、自分がやりたいようにやることにした。
- ・私は運良く親から経済的支援を受けられましたが、多くの場合そうではないようです。奨学金・助成金があるとベターかと思います。
- ・両親や大学の先生の支援と理解があったことが、とても心強かったです。

- ・社会人になる前にお親からお金を前借りできたので、経済的な不安はありません。また帰る場所＝安全地帯があるという意識があるからこそ、思いっきり海外に飛び込めたと思っています。

3. 目的意識・活動中のモチベーション

- ・そもそもの目的が「自分探し」だったため、具体的にやりたいことのイメージはなかったが、旅する中で徐々にクリアになり、自然とルートも変わっていった。
- ・現地でのプログラム内容が不透明であり、渡航前は不安であった。案の定、渡航後にプログラム内容について調整し直す等、事前準備不足を痛感した。
- ・短期間で移動を繰り返していたぶん、1か所に留学やインターンをした人のように腰を据えて真剣に取り組んでいないのではないかと葛藤がありました。反対に、いわゆる「中だるみ」をするヒマが無かったため意欲が途切れなかったです。

4. 周囲との遅れ・不安

- ・周囲との遅れは、自分の身の回りだけで考えたら不安になるようなことでも世界に出れば大したことないと気付けた。実際、1年遅れて社会に出たがなんら問題はないと感じる。
- ・就職活動への悪影響。
- ・「周囲から遅れる(ルールから外れる)のが怖い」という声を聞きますし、ギャップイヤーを取った私はよく相談を持ちかけられます。そのときに私がギャップイヤーをとることが出来た理由を、以下のように答えています。
 - ①もともと周囲から遅れる経験があるから怖くはない。
 - ②周りにユニークな生き方をしている友達がおり、話を聞いているうちに私も似た考えになってきた。
- ・私自身は就職しないことに対しネガティブな意識はなかった。親や先生も応援してくれた。しかし周り(特に大学の同級生)から「就職もしないで・・・」

「甘えてる」「逃げでしょ」というような目で、時には言葉で言われることが辛かった。

- ・大学の友人が学校の話や就職活動の話をしているのを聞いていると、自分は何をしているんだろうという気持ちになったことがある。
- ・周囲との遅れによって被るデメリット以上にギャップイヤーを取って得られるメリットが大きいからこそ、価値があると思った。

5. その他

- ・海外で私はギャップイヤー中ですと言うと、「いいね！君にとってすごく良い経験になるに違いない！」という返事が多かった。海外ではギャップイヤーは当たり前でもあるし、前向きに捉えられている。しかし日本では、ギャップイヤーという言葉さえ知られていない。だから日本では『経歴に傷がつく』等マイナスにとらえられてしまう。これはすごく悲しいことだと感じました。あと、近年、『既卒三年まで新卒』として雇う会社を国が応援している。私もこのシステムを導入している会社から内々定をいただいた。日本でもっとこれを扱う企業が増えれば、社会人になる前にギャップイヤーを経験できる人が増えるのになと思いました。
- ・ギャップイヤー期間中に何をしたらいいのかとても悩んだ。それを相談できるような相手もいなかった（「ギャップイヤー」を知っている人がいなかった）のでそこは苦労した。だが、だからこそ、自分自身で考えて行動する良い機会になったと思う。
- ・カリキュラムの変更
- ・再就職（帰国後の進路）
- ・「自己の成長」だけを目的に行くなら別にそれでも構わないと思いますが、現地にボランティアなりに行くつもりなら、役立たずを送ってしまわないように事前に入念な準備が必要だと感じました。”
- ・ボランティア活動中の現在よりも、帰国後の生活について、悩ましく思う。
- ・海外での活動は、語学が出来ないと話にならないです。いろいろな人から「語学が出来なくとも何とかかなる！」という応援の言葉を貰っていましたがそんなことは全くありませんでした。

6. さいごに

以上、経験者アンケートより、ギャップイヤーへの

課題を紹介した訳であるが、それぞれの課題の重要性も一個人の時期によって異なる。ギャップイヤーを取る前は、大きな課題であったことが、実際に活動を終えた時や数年の月日が経った時には、さほど重要ではなかったりする。見方を変えれば、ギャップイヤーを取った本人がその障害を乗り越えた証であろう。

最後にスティーブ・ジョブズの言葉（注1）と共に本章をしめくくる。

“未来に先回りして点と点をつなげることはできない。君達にできるのは過去を振り返ってつなげることだけです。だから点と点がいつか何らかのかたちでつながると信じなければならぬ。自分の根性、運命、人生、カルマ、何でもいいから、とにかく信じるのです。歩む道のどこかで点と点がつながると信じれば、自信を持って思うままに生きることができます。たとえ人と違う道を歩んでも、信じるのが全てを変えてくれるのです。”

“私は 17 歳の時、こんな感じの言葉を本で読みました。「毎日を人生最後の日だと思って生きてみなさい。そうすればいつかあなたが正しいとわかるはずですよ。」これには強烈な印象を受けました。それから 33 年間毎朝私は鏡に映る自分に問いかけてきました。「もし今日が自分の人生最後の日でしたら今日やる予定のことは私は本当にやりたいことだろうか？」それに対する答えが「ノー」の日が何日も続くと私は「何かを変える必要がある」と自覚するわけです。”

“君たちが持つ時間は限られている。人の人生に自分の時間を費やすことはありません。

誰かが考えた結果に従って生きる必要もないのです。自分の内なる声が雑音に打ち消されないことです。

そして、最も重要なことは自分自身の心と直感に素直に従い、勇気を持って行動することです。

心や直感というのは、君たちが本当に望んでいる姿を知っているのです。

だから、それ以外のことは、全て二の次でも構わないのです。”

Reference :

(注1) スティーブ・ジョブズ 伝説の卒業式スピーチ (日本語字幕)

<http://youtu.be/RWfs6yTiQQ>

日本でのギャップイヤー経験前後の評価の試み

鬼頭 豊和 (国際文化青年交換連盟日本委員会 [ICYEJAPAN] 理事)
原 卓矢 (国際文化青年交換連盟日本委員会 [ICYEJAPAN] 会員)

ギャップイヤーを経験することで、どんな変化をもたらすのか？

本章は、ギャップイヤー経験者に対し、アンケートを実施した結果を踏まえながら、ギャップイヤー経験前後の変化について、ご紹介する。

1. 経験前後の変化で何を評価指標とするか？

意外とこれは難しい話である。評価の観点で見るポイントが異なるからである。実際に、ギャップイヤー・プラットフォームの有識者勉強会でも議論になった。

評価観点としては、「主体性」がポイントになった。ギャップイヤー自体は、強制されるものではなく、主体的に自分の自由意志で行うものである。同じようなことがボランティアにも言える。

ギャップイヤー経験者アンケートでは、海外ボランティアを経験したNICE私の履歴書(注1)を参考に、以下の6つの観点を評価指標とした。

評価指標	例
実務的なスキル・知識	語学力や実務を遂行するための専門知識 テクニカルスキル
人・社会とやっていく力	協調性・柔軟性・寛容さ・伝達力・社会性・ ユーモア力
自分でやっていける力	自信・有用感・生きる力・行動力
進路・目標の明確化	こんな仕事に就いた、専攻を変えた、目標 の人物ができた
社会への考えや価値観	豊かさの尺度、異文化理解、食べ物と命
人生に生きる人脈	結婚相手、親友、仕事の相棒、趣味の同志 第2の里親

2. ギャップイヤー前後の変化でみえたもの

アンケートの結果は、全般的にギャップイヤー後の評価が、ギャップイヤー前より上回る結果になった。しかし、実務的なスキル・知識が他の指標よりも変化が少ない値となった。(図1)

ギャップイヤーを行う趣旨としては、専門知識の習得よりも、他者との繋がりやチームワークを通じた経験を養うことに重きをおいてように推察される。

その中で大きいのがリーダーシップを養うことであり、社会において必要な「人・社会とやっていく力」と「自分でやっていける力」をギャップイヤーでの活動で経験を身につけられることが多い。

結果として、「社会への考えや価値観」への変化・多様化に繋がり、「人生に生きる人脈」や「進路の明確化」、「実務的なスキル・知識」に影響されると考えられる。

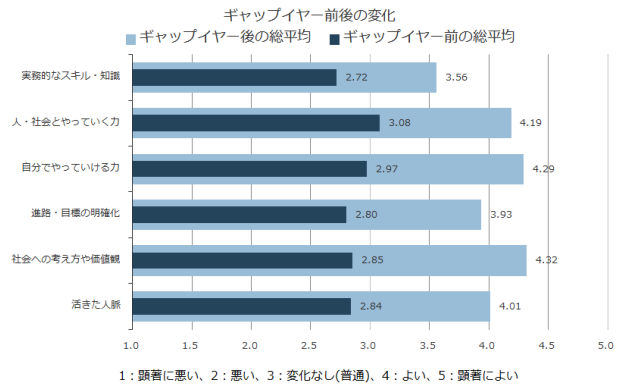


図1. ギャップイヤー経験前後の変化

後述ではアンケート回答の一部を掲載する。ギャップイヤーを考える上で参考になれば幸いである。

3. 自分でやっていける力

- ・どこ国でも極力徒歩で行動したので、総合商社入社後も途上国内地に一人で行動出来た。
- ・「仕事を完結できる力、完璧にこなす力」という意味では前後であまり変わりはない。しかし「どんな状況にあらうと、自分でどうにかする力」なら養われたと思う。過酷な(サバイバルな)メキシコのおかげで・・・
- ・途上国で日本人一人の中で仕事をしていくことで、語学力、自分でやっていける力、周囲を巻き込んでいく力がついたと思います。

4. 進路・目標の明確化と価値観の変化

- ・「自分探し」が主な目標だったが、それがはっきりと見えた。農業の知識は増えたが、実務的なスキルよりも、考え方や価値観の変化が大きかった。帰国したら、定めた分野の勉強をしたい。
- ・交換留学を通じて、専門分野の知識を高まり、スピーキングやライティングなど語学力も向上出来たと思います。インターンシップを通じては、更に専門的なライティング力やフィード調査のスキルを身に付けることができ、社会の中で生きていく自信をつけられたと思います。また、留学、

インターンを通じて、世界中の人々の様々な生き方に触れられたことで、より多くの選択肢の中から進路を考えることができました。

- ・社会人5年ののちにギャップイヤーを取っている
ので、スキル等についてはギャップイヤーを通して
変化するものでもないのですが、医療分野に
キャリアチェンジしたタイミングで、医療分野に限
らず福祉・教育等の分野の様々な事例を視察し、
ボランティアとして活動する中で、自身の将来の
働き方の選択肢と具体的なイメージは、ギャップ
イヤー前よりも広く、かつそれぞれが具体的に
なっています。
- ・海外に出てみて、日本という国を客観的に見る・
考えることができた。
- ・今まで外に眼が向いてばかりであったが、自分の
国についてももっと知りたいと思うようになった。
- ・ギャップイヤー取得前も夢、目標はあった。しかし
ギャップイヤーを通しそれらは大きく変化した

5. 活きた人脈

- ・異業種の年輩の知人ができ、復学後のよき人生の
先輩として相談に乗ってくれた。ギャップイヤー
中に働く経験を得られたので、就職活動や社会に
出てから何をやるか明確になった。
- ・価値観や人脈等については、日本中・世界中の医療・
福祉・教育分野中心にボランティアに入らる中で、
世界中のどこでもそれぞれの地域で頑張っている
人がある、ビジョンを持って活動している人がある
ことを改めて知り、そんな素敵な彼らと繋がり、
インスパイアされたり、今後も一緒に刺激し合い
ながら未来をつくっていこうと思える仲間になり
ました。
- ・中期だったが海外滞在の経験は、自然観や社会観の
違いを経験できたことで、日本を客観的にみられるよ
うになったと思う。
- ・キャリア形成に役立つとおもう。
- ・日本に留まるのではなく、世界と関わりを持ち続ける
ことの重要性を再認識しました。

6. 総合的によかった

- ・まず英語が圧倒的にできるようになり、第二外国語
(ヒンディー語)も日常会話ならこなせるように
なった。また、何より価値観が地に足のついたもの
になった。具体的に申し上げれば、『いい学校→
いい企業』というルート以外にも面白い人生の選択

肢がたくさんある」と思うようになった。

また、1人でも海外でもどこでもやっていけると
いう自信がついた。そして何より、自分が生涯を通
じてやっていきたいことの方向性が明確になった。
語学留学をしていたので、スキルとしては語学が身
に着いたことは大きいと思います。また他の国の友
人もできたため、外国の文化も知識として得ること
ができたし、被災地支援を通じては被災地の生の声
や現状の身を持って体感することができました。

- ・2回のギャップイヤー経験を通じて本当に多くの
方々とお話しし、関わることができました。また、
パッケージ留学ではなく、自力で留学先を決めたり
全てを手配した経験などを通して、自分でやってい
ける力が養われたのではないかと考えます。
進路や目標の明確化に関しては、自分の得意なこと、
好きなことが経験を通して見えたので、そこから自
分の進路をじっくり検討することができました。
社会への考え方や価値観も、様々な立場や年代、
国籍の方々とお話しすることを通して、文化や考え
方の違いを認めお互いを尊重し合う姿勢を持ち
たいと思うようになりました。
- ・日本以外の人生の歩み方・働き方を、頭で分かった
だけでなく体感出来た。

7. その他

- ・逃げられない環境、頼る人がなかなかいない環境
だったため、何事も自分ひとりで向き合い、やり抜く
強さを身に付けたように思う。
- ・普段の仕事では出会えない分野の知り合いが出来た
こと、海外に住んで視野が広がったことがあげられま
す。実務的なスキル以上に、自己形成という面が大き
かった。ギャップイヤーを通じて「人間力」が上がり、
どんな難しい問題でも必ず立ち向かえる自信がついた。
また「考える力」を身につけることができ、常に自分、
そして周囲・社会がどうあるべきか考えられるよう
になった。
- ・ギャップイヤーそのものだけで自分の中に変化があつた
とは思っておらず、自分の人生の流れの中でギャップ
イヤーがあつたことで、その後の経験から学べる世界
が広がったと思う。ギャップイヤーの後Aを経験する
のと、ギャップイヤーなくてAを経験するのを比べた
ときに、前者の方がAの経験後の変化が大きいと思う。

8. どちらかと言えばなかった

- ・もともと目的を持ってボランティアに参加しているため、大きな変化はない。しかし、人脈の広がり、そのつながりから得た知識や助けは、何者にも変え難い。
- ・僕の場合は、うまくいかず、逃げるようにして帰ってきたので、あまりいい思い出はありませんでした。ただ、今となっては、自分の価値観を創る大きな出来事であったことは間違いありません。

9. 今後の展望について

今回は、初めてギャップイヤー前後での評価を試みた。各人のギャップイヤー前後の評価は主観的なものに基づかれているが、規模や母数が増えてくれば、ギャップイヤーを経験した人の行動特性などの客観的な分析できると思われる。

もしこの分析が進めば、学校での有益なギャップイヤー・プログラムの制度検討や、企業での人事採用や人材育成にも応用できるであろう。

第4章 第1節

これからの社会へ ギャップイヤー推進の是非と目指す社会

開澤 真一郎（日本国際ワークキャンプセンター[NICE]代表）

この章では、日本社会の各ステイクホルダーがどのような行動と連携を進めることが求められ、望ましいのかを考える。その際、忘れてはならないのは、そもそもそれによりどのような社会を目指すのかという「鳥の目」と、経験者・現場から出てきた個々の課題に応える「虫の目」の両方であろう。

1. いやいや、推進なんていない？

ギャップイヤーは、いつでも誰でも、とまでは言わないが、制度や環境がどうであろうと、個人でやろうと思えばできる。実際、今までも休学したり、卒業後や転職時に世界をまわる人は大勢いた。もっと言えば、「人生の積極的な寄り道」にまで定義を広げると、古今東西、無数の人達が様々な形でやってきた（英国発祥のある程度システム化されたギャップイヤーと、それらは完全に同列には扱えないが、共通する部分も少なくない）。

また下手なやり方で推進をすると、例えばやる気のない若者を受け入れた地域が嫌な思いをしたり、本人も却って自信を失うなど、弊害も大きくなりかねない。

それでも現在の社会環境では、やりたくてもできない人が少なくない。その阻害要因（例：家族が反対、就職に不利になりそう、お金がない、大学が消極的）の中には、ギャップイヤーによる成果が正当に社会で評価されていないことに基づくものも少なくない。

ここではあくまで、やりたくない人にまで強制するようなものではなく、やりたい人はチャレンジできる・しやすい環境をつくるような「推進」を考えていく。

2. 同床異夢でもいいのか？

ギャップイヤーに何を期待し、どのようなものをどう推進していくべきなのか。これは、それぞれの個人・団体・セクター・地域などの立場・状況や価値観などによって分かれるため、集約するのは非常に難しい。そもそもその社会へのビジョンから、となると、尚更である。

例えば政府にとっては経済成長・競争力向上・青少年や地域の課題解決、企業にとっては社員のビジネス力や自社の売上アップ、若者自身は自分の成長と人生の充実、大学にとっては中退率の低下や就職率の改善、受入地域にとっては地域活性化や施設の運営・農作業等の労働、NPOにとっては参加者の増加や運営への活躍に、どれだけ成果があるのか等が直接的な「実利」として挙げられる（それぞれ、損得だけで動く訳ではないにせよ）。

そうなると、例えば共に進めようと言っても、求める方向性や成果が異なるのだから、推進したいものや方法の食い違いも出てくるだろう。例えば、ボランティアなどの社会活動を旅よりも推奨するか、など。

それでも、違いは違いとして認め合いつつ、共通する部分で力を合わせていかないと、埒があかない。

政府、教育機関、企業、NPO、若者、その家族などが一つのセクターだけで、ギャップイヤーを望ましい形で効果的に推進するのは無理があり、全てのセクターが持ち味を発揮しながら、連携していくことが不可欠である。

3. そもそも目指す社会は？

ギャップイヤーはそれ自体が目的ではなく、あくまでよりよい社会と人生をつくるための、一つ的手段・ツールである。課題を解決する万能薬ではないし、中身次第でもある。が、他のツールにはない、ユニークな成果を生み出し得るものでもある。

私はその推進によって目指す社会は、「豊かな寄り道を気軽にでき、多様な生き方を受け入れられる懐の深い社会」、また別の言い方をすれば「遊びの部分を持つことのできる、余裕・タメのある社会」だと考える。

これに対して、「遊んでる余裕なんかなく、一生懸命生きていくので精一杯な人が大勢いるんだ」「社会の課題も山積で、危機にある中、何呑気なことを言ってるんだ」と思う方もいるだろう。しかし、人生や社会の全体の状況を良くしていくために、むしろ有用なのではないか。

「腹8分目」と言うが、私は何事も「8分目」が重要だと考える。スポーツや武道でも8割の力を出すことが最もいい状態を生むことがあったり（抜くことも含め）、寝ただけ寝ると却って体に良くなかったり、機械も遊びの部分がないと壊れやすかったり、組織でも「役に立ちそうもない」人・仕事を2割程持つと非常時に意外な活躍をしたり、怒っても2割は相手を赦す心を持ったり。

また骨と骨の間に関節があるように、ギャップイヤーは人生のステージとステージ、普段の人生では出会わない人と人をつなぐ役割を果たし得ると思われる。

これらは私見にしか過ぎない。大切なのは、連携する前に、それぞれがどのようなゴール・方向性を持っているのかをぶつけ合い、話し合うプロセスを経て、できる所から計画をまとめていくことではないだろうか。そして最初から完璧なものを目指し過ぎず（いつまでたっても始められないので）、実際にやりながら、振り返り、目標や連携内容・方法を修正していくべきだと考える。

第4章 第2節

望ましいギャップイヤーとは？ 4つの論点から！

開澤 真一郎（日本国際ワークキャンプセンター[NICE]代表）

望ましいギャップイヤーは、それぞれの立場や意見によって異なるし、全体で一つのフォーマットだけに統一することも、不要かつ不可能である。その上で、この節ではこれまで会合で行われてきた論点を幾つかご紹介し、自分の所で導入する際の方針・計画作りに役立てて頂ければ幸いである。

以下の1.～4. は2012年7月にNPO・政府・大学・企業の担い手と若者達が計100名以上集まって行われた「ギャップイヤー・フォーラム」において、筆者が担当したパネル討論で挙げられた論点である。国会議員、大学副学長、NPO事務局長、省庁職員、企業担当者に敢えて「○」「×」に分かれて頂き、活発に行われた議論を一部紹介させて頂きながら、私見を述べさせて頂く。

1. 活動は海外が中心であるべきか？

- 「なるべく異質な経験をした方がいい。」
- ×「図書館で本を読んでる人がいてもいい！」「国や大学が海外経験を推進するなら刃向かって行かない人がいてもいい。そういう人がいてこそ日本は成長する。」

「ギャップイヤー」は、一般に政府・企業・大学等では「グローバル人材育成」と結び付けられることが多い。そうすると、やはり基本的には国外で異なる国の文化・生活・人々に触れた方が望ましいと考えられるだろう。

一方で、国内でも在日外国人等との交流はできるし、NICEやICYEが国際ワークキャンプ（世界中から参加者が集まる合宿型のボランティア活動）や長期ボランティアで外国人を受け入れている地域で活動する方法もある。

また都市で育った若者にとっては、日本の農村での伝統的な暮らしは海外の都市での生活以上に「異文化」となることもあり、普段は出会わない異なる地域・世代の人達との協働から得られ、磨かれることも多いであろう。

2. 希望者だけがやるべきか？

- 「強制は間違い、自分の意志でやること。」
 - ×「放っておいてもやる人じゃなく、もっと広い層に広めるためにどうすればいいのかが大切。」
- 会場の参加者にも聞いた所、○が圧倒的多数だった。

意欲を十分持たない人が混じって全員が行うと、前節でも述べたように本人だけでなく、受け入れる地域にとっても、多大な迷惑が生じるリスクは無視できない。

ただ一方で、時期やプログラムの選択肢を多様にしたリ、自分でも作る余地を作ったり、事前準備を充実して意欲やマナーをある程度向上することもできるであろう。

皆さんの中にも、最初は興味がなかったけど、背中を押されてやってみたら、という経験を持つ方も多いはず。

ちなみに筆者は国士館大学で11年前から、休み期間中に国内外のワークキャンプに参加する授業を行っている。選択制で、履修しても結局参加しない学生もいるが、しっかり参加・報告して受入側の評価も基準を満たせば単位になるため、ちょっと「背中を押す」形と言えよう。

3. 旅よりもボランティアを推奨すべきか？

- 「一ヶ所にずっといることで見えてくる世界が違う。短期の旅ではなく、長期でどっしりと滞在することで、日本を見るものさしも変わってくる。」
- ×「旅の質にもよる。」

他にも「起業」「インターン」「バイト」更には「趣味」「何もやらない」など、色々な活動タイプがあるが、勿論、単純に優劣をつけられるものではなく、全て中身次第でもある。誰が何を期待するかによっても、異なる。

ただ筆者は、本人の成長だけでなく、受入地域にとっての成果も大きな柱と考えている。荒れた森や田畑の再生のマンパワーを生み出し、福祉や教育の現場、過疎地でも新しい風として、ユニークな役割を果たしている。

「社会貢献」を強要されると息苦しくなるが、そこを評価・推奨するプログラムもあって良いのではないかな。更に、終了後の活動継続・発展を促す仕組みも併せて。

その場合も例えば旅人が地域で活躍することもあるので、活動タイプを限定する必要はあまりないと思う。

4. 政府は財政支援をすべきか？

- 「普及の流れを作るためにも、まずは国が！」
- 「参加したくてもできない経済的な事情のある人へ、国だけでなく、色々な面からのサポートが必要。」
- ×「全て国に頼らない、民から民への流れを作る、国が行うと大金かかることを民間ならもっと少額で大勢の人を支援できる。NPOなどに助成して民から民へ！」

どの程度有効に使われ、成果を高めることに役立つかが重要である。また、本人や関係機関が税金に依存し過ぎて、自由や自助努力を失わないようことも肝要だ。

外からのお金は、基本的に「離陸のためのエンジン」として活用されるのが望ましいのではないかな。

上記以外にも、大学や企業での評価や特典の有無・あり方、期間の長さなど、色々な選択肢と論点がある。こうした様々な要素を考え合わせながら、自分達の場合のベストミックスを仕立てて試行していくことが重要である。

第4章 第3節

ギャップイヤーの望ましい推進へ、各セクターに対する提言

開澤 真一郎（日本国際ワークキャンプセンター[NICE]代表）

ここからは全セクター共通で、そして各セクターで、どのような行動・連携を展開していくことが期待されているのかを述べていく。が、各セクターの関係者にとっては、的外れだったり、賛同できない、余計なお世話と思えるものもあるだろう。以下はあくまで私見であり、最初のたたき台である。

1. 全セクターへの共通の提言

① 多様なスタイル・価値観の認め合い：

まずは社会全体で、もっと色々な生き方を認め合い、受け入れていくことが何より重要である。特に偏見・決めつけによって、「寄り道」がもたらす価値・成果を無視・否定せず、正当に評価されることが求められる。

例えば「休学している奴は挫折者だ」「ボランティアなんて偽善で、自分にも相手にも役に立たない」「能力は試験の点数だけで判断」等の偏った見方が、未だに根強い。

② 成果の測定・発信・向上の充実：

①で述べたような偏見が根強いのは、成果が社会で十分に認知されていないためでもある。ギャップイヤーの成果には、目に見えない・数字で表せない部分や時間をかけて積み重なるものも多い。可視化できる短期的な成果だけでは過小評価されかねないので、あくまで成果の一部でしかないことを強調しながら発信すべきである。その上で、できる限り測り、まとめる努力が求められる。

また自分の成長などは主観的・自己評価的な面も多いため、信用できない人も少なくないだろう。だからこそ、全てのステイクホルダーがそれぞれの視点・ニーズから評価し、共有し、組み立てていくことが求められる。

また成果を測ることにより、次の目標も設定でき、高める努力・工夫もしやすくなる。「ギャップイヤー＝善」ではなく、いかに素晴らしいものにするかが肝要である。

③ セクター間の連携の強化：

例えば、経済産業省の仲立ちによる財界と大学の産学連携推進会議や、大学の研究会への政府・NPO・企業の招待、また先進的に実践する大学によるNPOのプログラム紹介等、既に様々な交流・連携が行われている。

だが、まだまだ少なく、全セクターが参加する開かれたプラットフォームも存在しない。こうした状況を受けて（手前味噌ではあるが、事実として！）、前頁で紹介したフォーラムが開催され、そこから各担い手で構成される「ギャップイヤー・プラットフォーム」が発足した。

今後はこうした全てのセクターに開かれたネットワークによって、情報交換・連携促進・制度創設等に取り組むことが求められる。また、海外の諸機関とも連携を深め、世界中での望ましいギャップイヤー推進を、日本から積極的に働きかけても良いのではないだろうか。

【ギャップイヤー・フォーラムの簡易報告】



開催目的	① 各セクターが理解し合い、連携を強める。 ② 成果を整理し、共通のビジョンを固める。 ③ より多様で大勢の人々に理解を広げる。 以上を通じて、日本版ギャップイヤーを望ましい形で効果的に推進する場を構築する。
開催期間	2012年7月13日（金）18：30～22：00
開催場所	国立オリンピック記念青少年センター （東京都渋谷区）
主な内容	開会・基調スピーチ 第1部：成果・課題をリレートーク 第2部：望ましい形をパネルトーク 第3部：産官学民のプラットフォーム作り 第4部：アクション・プランづくり（翌日）
参加者	103名（平均26歳：判明分）。女性42%。 宿泊者34名・宿舎参加者30名。 *セクター別：若者48%、NPO 27%、教育機関9%、政府・政治7%、企業5%、メディア5%
主催団体	新しい公共をつくる市民キャビネット及び、同地球社会・国際部会、特活）NICE（日本国際ワークキャンプセンター）、特活）ICYE Japan（国際文化青年交換連盟日本委員会）、財）HIF（北海道国際交流センター）

2. 各セクター（ステイクホルダー）への提言

今までの諸会議やアンケートの結果も参考にしながら、整理したものである。当事者＋外部の人達で、今後は「ギャップイヤー・プラットフォーム」で行うものも含め、様々な所での議論の成果を積み重ねてしていきたい。



セクター	① 口・出口に関して	②休学・休職に関して	③経済面等の特典	④その他
教育機関	入学・卒業時期の柔軟化	休学しやすい環境作り	単位の付与	成果の研究 事前・事後ケアの充実
企業 政府	採用時期の複数・通年化	休職しやすい環境作り	採用時の評価 経済的な支援	
NPO・地域		経験者と語る場作り		
若者自身	チャレンジ精神。学校・企業の選択や働きかけ。		様々な自己努力	

① 入口・出口に関して

①-A. 入学・卒業時期の柔軟化（教育機関）

秋開始の先行事例として知られる国際教養大学、名古屋商科大学などに加え、今年から東京大学でも入学直後に1年間活動するFLYプログラムが導入され、その成果が目される。

半年ずれる場合は主流の就職時期とずれるため、二の足を踏む学校も少なくないが、通年採用の会社もあるし、卒業後の半年間を2回目のギャップイヤーとして有意義に過ごすこともできるので、選択肢としてあっても良い。

①-B. 採用時期の複数・通年化（企業・政府）

通年採用に切り替えたり、卒業後3年程度まで新卒扱いしようと検討する動きもあるが、まだほとんどの企業や行政機関は大多数を一括で採用する形を続けている。

企業担当者によると、まとめて研修を行いたいことや、「同期」の連帯が育まれやすいことも利点として捨てがたいようだ。が、先述の「遊び」の部分として、例えば全体の2割程は別の時期にユニークな人材を採用するスペースを持つことも検討に値するのではないかと。

①-C. チャレンジ精神（若者）

ここで精神論を説いても仕方ないかもしれないが、若者達への提言としては、まずは改めて「興味があるなら、勇気を出して行動してみよう」「広い世界に飛び出し、もまれて、吸収してみよう」と呼びかけたい。

①-D. 学校・企業の選択や働きかけ（若者）

また受験や就職活動の際に、こうした「寄り道」に対する姿勢も調べ、希望を選択する際の一つの要素とする人が増えれば、学校や企業の側にも変化を促すだろう。

また既に就学・就職している場合でも、自らが通う大学や企業に声を集めて提案したり、自らのプランを出して直談判してみることもやってみてもいい。

② 休学・休職に関して

②-A. 休学しやすい環境作り（教育機関）

私立大学でも年間1~2万円程度で休学できる立命館大学や国士舘大学を筆頭に、数万円で休学できる所も増えてきた。が、まだ通学時の半額など高額な学費を払う必要がある所が少なくなく、学生にとって大きな障害となっている。大学側としては休学をあまり誘発したくない事情もあるのだろうが、授業を受けていないのに高額のお金を払うのは、やはり正当性に欠けるのではないかと。

②-B. 休職しやすい環境作り（企業・政府）

日本では富士ゼロックスが、他社に先駆けて3ヶ月間~2年間の「ボランティア休暇」を1990年から導入し、今までに40名以上が活用してきた。その後、大企業を中心に地方自治体などでも、休職中に一定の給与を支給する場合も含め、こうした制度を持つ所が増えている。

導入を促す一つの方策として、例えば政府が育児休暇と似た形の財政支援を行っても良いのではないかと。

また制度はあっても実際は取りにくい、という声もよく聞かれる。職場の方でも抜けられると困る事情も当然あるだろう。が、今後の日本社会の職場は育児休暇で抜けて復帰するケースが現在よりも遥かに増え、どのみち出入りがあってもやっつけていける態勢にならざるを得ない。

逆に育児休暇で抜けた所に、ギャップイヤーを受け入れて不足分をある程度補う、という方向もあり得る。

②-C. 経験者と語る場作り（NPO）

様々な学校や企業から若者を受け入れているNPOは、そうした経験者を集め、これからしてみたい若者や導入を検討している学校・企業の担当者が体験談を聞ける場を創ることが期待される。実際、筆者の所属するNICEとETIC、ICYEなどのNPOが合同で「休学のススメ」というイベントも何度か開催し、参加者に非常に好評だった。

③ 経済面等の特典

③-A. 単位の付与（教育機関）

例えばブルネイ大学では、1年間（半年間×2回）のギャップイヤーが4年間のカリキュラムの中に埋め込まれ、通学時と同等の単位数が得られるようになっている。

もともと卒業が遅れてもいいや、と思って取得する学生には必要ないことであるし、単位目当てで活動意欲の薄い学生が多数出てくる恐れもある。

が、筆者の経験から言えば、募集と案内のやり方次第である程度カバーできるし（それでも最低限のラインに達しない場合は断ることもできる）、単位取得が主な動機だと活動に要する時間・費用・労力に比べて到底割に合わないため、結局意欲のある学生だけが残っている。

③-B. 採用時の評価（企業・政府）

当然ながら、どの職場でも自分達が求める最適な人材を採用するために常に真剣・厳正に審査をしているのであり、外部がとやかく言うのは大きなお世話であろう。

が、一方で、ギャップイヤーで身につけた力や経験が適切に伝わらないために、実は会社にも有用になり得る若者が見過ごされてしまうことも少なくない。話す側と共に、聞く側の姿勢・力も問われるのではないか。

③-C. 経済的な支援（教育機関・企業・政府）

学費の減免・免除に加えて、活動中の費用に対しても先述の東京大学のFLYプログラムのように、一定の補助制度を持つ大学もある。

また企業の中には自社の社員が行う場合だけでなく、損保ジャパン環境財団のように学生がNPOで活動する際の費用を補助する取り組みもある。航空会社などでも、一定の基準を満たし、空席がある場合のみ割引を適用する「ギャップイヤー・メイト」を導入できないだろうか。

政府も文科省が今年度からグローバル人材育成推進事業を始め、42校が採択された。他のセクターに対しても有効な形で支援する枠組みが求められている。

③-D. 様々な自己努力（若者）

一方で経済的に不利な若者でも挑戦できる環境作りが必要だが、他方で若者自身の工夫・努力を妨げ、変な依存・怠慢を生み出さないように気をつける必要もある。

例えば資金が足りないため、計画書を作って親戚や友人から寄付を集めまわって確保した例もある。ジャストギビングのような方法を使う手もあるだろう。

④ その他

④-A. 成果の研究（教育機関）

先に、全てのセクターが共有しながら、と申したが、その中でもやはり餅は餅屋、この種の調査の蓄積・手法・人材のある大学が中心的な役割を担うことが期待される。

④-B. プログラム開発（企業・政府・NPO）

既に様々な活動の場を国内外のNPO・地域社会を中心に、企業や政府も提供している。が、一つのセクターでは様々な限界もあるため、互いの持ち味を活かしながら協働で行う事業を創設・発展させる必要がある。例えば、農水省が2008年度の補正予算から開始した「田舎で働き隊」事業は、手続き面などで改善の余地も見受けられるが、各地で成果を着実に残しており、好例の一つと言えよう。

以下は、筆者が2009年に創設時から部会長を務める、政策提言のNPO全国ネットワーク「市民キャビネット」の「地球社会・国際部会」で提案されているものである。

★ アジア・ボランティア・サービス（AVS）

日本→アジア、アジア→日本で青少年が9ヶ月間、NPOで環境・農業・福祉・教育のボランティア活動。

★ 荒れた森・畑を再生する長期ワークキャンプ

日本の荒れた森と田畑をニート、難民、アジア人を含む多様な人達で再生する、9ヶ月間の合宿型プログラム。

★ 長期ボランティア・ビザ

従来の就労や研修、文化とは異なる形で日本にて様々な地域活動をする外国人ボランティアのための制度。

最初の2つは、プログラムの例として参照されたい。最後の提言は、ギャップイヤーを取った海外の若者が日本で活動することを推進するものであり、これまで本書で述べてきた、日本人の若者によるギャップイヤーの推進とは異なるものである。筆者はそれぞれ意義・成果もあり、相乗効果もあるので、共に推進すべきと考える。

④-C. 成果・安全向上（企業・政府・NPO）

各団体が行う既存のプログラムでも、運営の質や活動の成果を一層高める努力が求められている。

また安全対策も非常に重要である。イギリスでは「ギャップイヤー保険」があり、40歳まで加入できるため、高卒時だけでなく、大卒時や転職時にも適用される。

④-D. 事前・事後の充実（教育機関・企業・政府・NPO）

大学や企業がギャップイヤーに学生・社員を送りだすにあたって、全て自前でやろうとせず、長年のノウハウ・実績のある他の団体・セクターと協働で行うことが勧められる。その団体の活動に参加する者がいなくても、例えば事前・事後研修を共同で運営する、など。

また、終了後に本人が活動を発展させたい場合、大学とNPOが協働して効果的に応援できることもあるだろう。例えばケニアのスラム地域で活動した学生が、帰国後にサークルを作り、フェアトレードを始めた例もある。

第5章 第1節

推進機関＝ギャップイヤー・プラットフォームのこれから

開澤 真一郎（日本国際ワークキャンプセンター[NICE]代表）

前章で述べた推進のための行動・連携を効果的に進めていくには、全てのセクターのリーダーや実務者に関わったネットワークが必要である。そうした問題意識によって、産官学民の担い手達が2012年に結成したこのプラットフォームはまだ赤ん坊であり、みんなで育てていくことが求められている。

1. これまでの主な活動実績

① ギャップイヤー・フォーラムの企画・運営

2012年7月（詳細は3頁前を参照）。

長瀬慎治：UNV（国連ボランティア計画） 東京事務所

原田勝広：明治学院大学 ボランティアセンター長

* 他に複数の企業・省庁職員が、個人として参加。

② 研究会の定期開催

2012年からほぼ毎月。NPOを中心に各セクターの担い手が集まり、ギャップイヤーをめぐる動きやその背景にある社会状況の共有、今後のあり方の議論、④白書の作成、⑤フェスタの企画などを活発に話し合い。

⑤フェスタの開催前に「担い手会議」も実施。

<プラットフォーム事務局>

鬼頭豊和（ICYE 理事）、原卓矢（ICYE 会員・大学生）

山口紗矢佳（NICE 職員）、直井友樹（NICE 職員）

* その他、様々な団体の職員・会員が活発に参加。

③ 本白書の作成と、経験者アンケートの実施

前者は2012年12月から会合・作業を重ね、作成。後者はその一環として、2013年初頭に幅広く実施。

3. 今後の計画

誕生から1年足らずで足腰は弱く、広がりも不十分である。またこのために専念できる職員もいないため、本業を抱える担い手達で割ける労力には限界がある。

一方で組織を限りなく簡素・身軽にして（会員制や理事会なども持っていない）、絞り込んだ活動に集中して取り組んできたことは、現段階では妥当と言える。

今後は組織を徐々に広げ、強化しながら、以下の活動を発展させることが、委員によって合意された。

④ 団体・セクター間の連携推進

例えばNICEの場合は、JGAPのサイトでの経験者の紹介、大学の会合への招待や協働プログラム作りなど。

① 情報交換・白書の作成

引き続き、研究会やイベント、メールなどを通じ、活発に行う。白書も毎年更新する予定。

⑤ ギャップイヤー・フェスタの企画・運営

2013年6月22日。東京都渋谷区で産官学民の担い手や若者達が約90名参加予定。プログラムの概要は以下のとおり。

- ・基調スピーチ（JICA スリランカ事務所長 青晴海氏）
- ・経験者によるパネルトーク
- ・受入先・大学・企業・政府・親代表のリレートーク
- ・ギャップイヤー見本市（10のブースを出展）
- ・ギャップイヤー教室・ギャブリンピック

この他、会合後の懇親会、ウェブやFacebook、メーリングリストによる広報や情報共有も行っている。

② 団体・セクター間の連携推進・プログラム作り

1:1で話せる様々な場を設けて、具体的な連携づくりを促進し、また協働プログラムも作成する。

③ 研究・共通ツールの開発

海外の事例も含め、研究を進める。成果の測定や研修の運営などのための共通ツールも開発したい。

④ 提言づくりと働きかけ

市民キャビネットなどとも連携しながら、より多くの担い手で議論して内容を充実し、発信・交渉する。

⑤ 普及・啓発・プロモーション

各地でのイベント、特別キャラバンの実施や、ギャップイヤー大賞の創設、世界会議の開催も構想中。

2. 現在の組織構成

<プラットフォーム委員>

青晴海：JICA（国際協力機構）スリランカ事務所長

池田誠：財）HIF（北海道国際交流センター）事務局長

池本修悟：市民キャビネット 事務局長

宇梶朋子：特活）ICYE（国際文化青年交換連盟日本委員会）事務局長

開澤真一郎：特活）NICE（日本国際ワークキャンプセンター）代表

北見靖直：国立青少年機構 指導主幹

砂田薫：JGAP（日本ギャップイヤー推進機構協会）代表理事

また一定の基準を満たした活動に対して、適切なプロセスで認定する正式な機関となる構想もある。

本プラットフォームはギャップイヤーのための、あらゆる個人・団体・セクターに関わった、おそらく唯一の全国ネットワークである。関わり・興味を持つ大勢の方々に加わって頂き、大切に育んでいきたい。

ギャップイヤー・プラットフォーム (GP)

<http://www.gapyearplatform.org/>